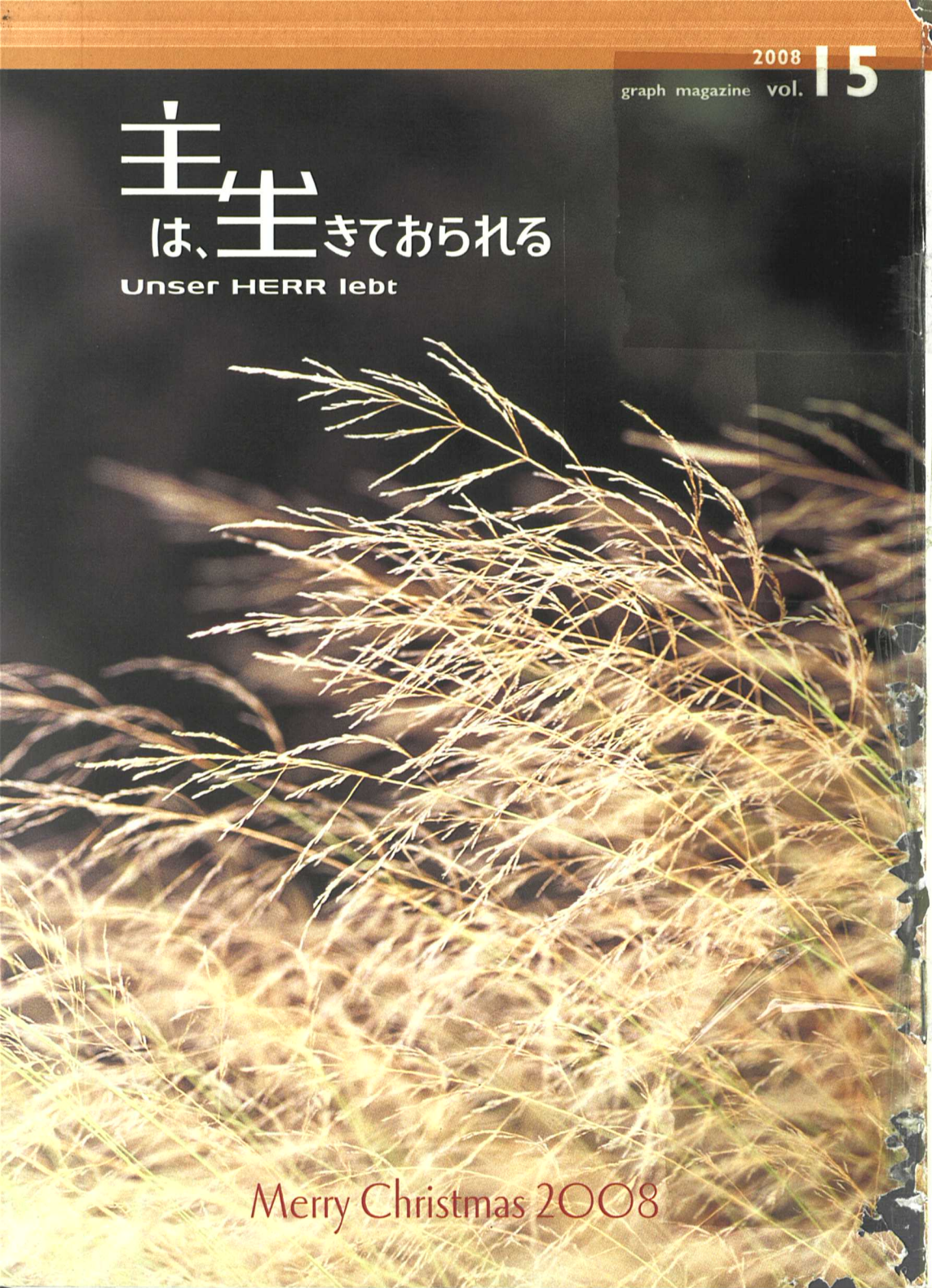
2008
graph magazine vol. 15

主は、生きておられる

Unser HERR lebt



Merry Christmas 2008

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません
（ヨハネ3･3）

vol. 15 | 定価100円（本体95円）

巻頭メッセージ
004 奉仕の精神 ―ゴットホルド・ベック

4人のメッセージ
020 キリスト者の旅 ―重田定義
026 でもおことばどおりに ―江藤善清
032 主は呼んでおられる ―平山義輝
038 この方はいったいどういうお方なのだろう ―森島左武郎

5人の証し
044 岸壁で手を離し抱きとめられました ―元永徹司
048 あの方は盛んになり私は衰えなければなりません ―藤井奈生子
053 私は真実でなくても、彼は常に真実です ―小池克明
057 主の良くしてくださったこと ―小池純子
061 主に生かされて ―大澤雅子



連載メッセージ
066 「聖書は何と言っていますか」 間違った望み ―ゴットホルド・ベック

特集
082 家庭集会の恵み

各地の集会から
094 こちら大分集会で～す
096 インフォーメーション・ボックス
ある母親の手紙から
「無償の愛」こそ介護の基本

メッセンジャーの予定表
098 結婚式・葬儀
100 メッセージ当番表（2009年1月～3月）／喜びの集いスケジュール

104 ビッキーのケーキづくり［かんたんに作れる ブユッシュ・ド・ノエル］

106 キリスト集会へのご案内
108 キリスト集会出版物のご紹介

住所録
110 キリスト集会のご案内（2008年12月1日現在）



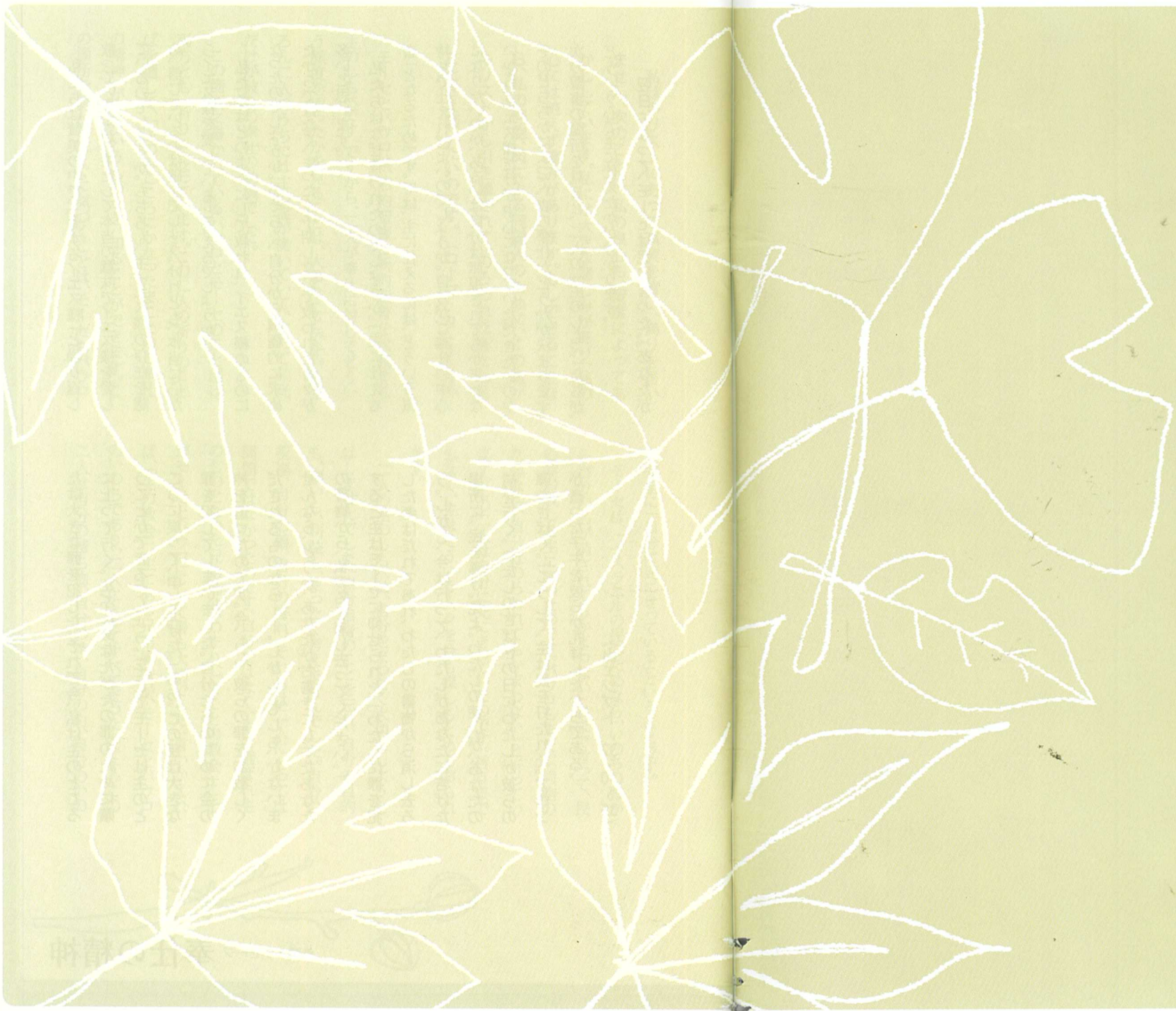
Unser HERR lebt

主は、生きておられる

巻頭メッセージ

奉仕の精神

ゴットホルド・ベック



巻頭メッセージ　奉仕の精神

私たちは賛美の中で、「愛するイエス様」と繰り返し歌っていますが、果たして本当の意味でイエス様を愛しているのでしょうか。もちろん、主イエス様の存在を認め、信じているのは確かでしょう。けれども、本当に心からイエス様を愛していると言えるでしょうか。

私たちはどのようにして救われ、イエス様のものになったのでしょうか。おそらく、自分から積極的に求めたからではなく、まったく予期しないで救われた方々が多いと思います。

私たちはなぜ救われたのでしょうか。「主に仕える者」となるためです。では、主に仕えるには、どういう気持ちで仕えればよいのでしょうか。自分がご奉仕の中心になりたいのか、あるいは自分は無視されてもかまわないから、イエス様だけが中心になっていただきたいのか、そのどちらかによって、真の奉仕かどうかが決まります。次の聖書の箇所を見ると、二人の「主のしもべ」たちが、どういう心で主に仕えたかが分かります。

翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。それで今、私は主のところに上って行く。たぶんあなたがたの罪のために贖うことができるでしょう。」そこでモーセは主のところに戻って、申し上げた。「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら――。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」すると主はモーセに仰せられた。「わたしに罪を犯した者はだれであれ、わたしの書物から消し去ろう。しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に、民を導け。見よ。わたしの使いが、あなたの前を行く。わたしのさばきの日にわたしが彼らの罪をさばく。」こうして、主は民を打たれた。アロンが造った子牛を彼らが礼拝したからである。

（出エジプト　32・30～35）

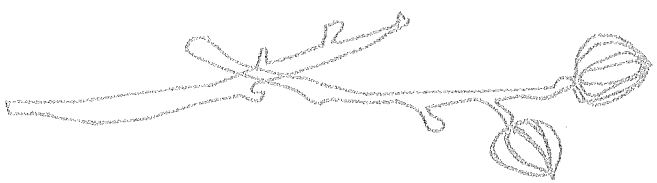
私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。（ローマ　9・1～3）

モーセとパウロは、旧約聖書と新約聖書を代表する主のしもべです。ですから、二人が奉仕に対してどういう態度を取ったかを見ることは、大事なことです。もちろん二人のうちには主の霊が働いていて、主のご栄光だけが彼らの奉仕の動機でした。

この箇所に書かれているパウロとモーセのことばは、両方とも「祈り」になっています。この二人の祈りのことばを通して、「主のみこころにかなったまことのご奉仕の精神」がどういうものかを、知ることができます。この箇所を読んで、すぐに気づくことは、モーセもパウロも完全に「自分に死にきっている」ということです。

モーセは、「イスラエルの民のためなら、いのちの書から自分の名が消されてもかまわない」とまで言って、民の罪の赦しを主に願ったのです。パウロもまた、「同胞のためなら、自分はのろわれてもかまわない」と祈っています。この二人は自分に死にきっていたのです。言うまでもなく、主はそういう人々を今も探しもとめておられます。

二人の主のしもべは、自分をまったく大切にしようとはしませんでした。自分自身のことを忘れ、自分の目的も、願いも、利益も、まったく考えませんでした。自分の祝福、自分の義、自分の誉れ、それらは二人にとっては問題ではなかったのです。自分ではなく、主に選ばれ主のものとなった兄弟姉妹、つまり、「まことの教会」こそがモーセとパウロにとって最も大切でした。言いかえれば、「主の教会」、主にある兄弟姉妹が、モーセとパウロのいのちであり、二人にとってすべてだったのです。この二人は自分の持ち物、自分の時、自分の力、自分のいの



ちは、「主のみからだである教会」のため、主にある兄弟姉妹のためにあるのだと固く信じていました。ですから、もし信じる兄弟姉妹が霊的に成長せず、悩みをもっているのに、その問題の前に立ちはだかってとりなしをし、祈り、守ることができないなら、自分の生き甲斐はないと、主のしもべであるモーセとパウロは信じていたのです。

これが真の主のしもべの「心のあり方」であり、主が私たちにも何としても与えたいと願っておられる「奉仕の精神」です。その「心のあり方」について、これから四つの点で考えてみたいと思います。

1. モーセとパウロのうちに宿った主の霊

もう一度、出エジプト記32章32節を読んで見ましょう。**「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら――。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください」**と。

それから、ローマ人への手紙9章3節、**「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです」**。

二つの祈りを読むと、モーセとパウロにはいろいろな点で共通していることがあります。

まず、二人をこのような祈りに導いた原因は、主を知らず、救われていない人々、いわゆる未信者にあったのではなく、主を信じている者の犯した罪にありました。イスラエルの民は主によって特別に選ばれた民であり、奴隷だったエジプトの国から救い出されました。ところが、主によって贖われ、エジプトから救い出されたイスラエルの民は、まもなく主の恵みをすっかり忘れてしまったのです。モーセがシナイ山に入っている間に、イスラエルの民はとんでもないことをしました。モーセが山から降りて来るのが遅いので、アロンに迫って金で子牛の像を作ったのです。そして、鋳物の子牛を、「私たちをエジプトの地から連れ出した神である」、と言って礼拝しました。まことの神、主の前に、心から賛美をささげ、真心から主を礼拝していた人々が、何と偶像を礼拝するようになってしまったのです。このような恐ろしい罪を犯した民のために、モーセは祈ったのです。彼は主に言いました。**「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら――。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物（いのちの書）から、私の名を消し去ってください」**と。

そして、ローマ人への手紙9章を見ると、同じようなことが書かれています。イスラエルの民は主から離れ、主にそむき、ついに神のひとり子であるイエス様を十字架につけるという大きな罪を犯しました。この恐ろしい罪を犯したイスラエルの民のためにパウロは祈っています。**「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです」**と。

これらは、モーセとパウロが、「愛するに価する人々」のために主にとりなしている祈りではありません。悪魔に惑わされ、罪を犯して、「愛そうにも愛することのできないような民」のためにした祈りです。このことを考えるとき、私たちの心は震えます。自分が愛して、また、その愛に応えてくれる人々のために奉仕することは簡単です。ところが、モーセとパウロの場合は、その反対でした。モーセとパウロの愛に少しも応えようとしない人々を愛し、愛しぬいたのです。私たちもまた、主から離れていった人々に対して、同じ心の態度をもつべきではないでしょうか。

もう一つ、モーセとパウロには共通している点があります。それは心から愛し、すべてをささげた民から誤解され、苦しめられたことです。モーセはイスラエルの民をエジプトから解放しようと思い立ったとき、民に誤解され、自分の身に危険をおぼえて逃げなければなりませんでした。そして40年間、ミデヤンの荒野で生活するようになりました。また、その後、荒野の中を民を導

奉仕の精神

いて旅した40年の間、どれほどイスラエルの民、主を信じる人々に誤解され、苦しめられ、悩んだことでしょう。パウロの場合もモーセと同じでした。同国人であるイスラエルの民によって、苦しめられ、迫害され、誤解され、犯罪人のように取り扱われたのです。

しかし、この二人の神のしもべは、自分を理解してくれない人々のために、自らの生涯を与え尽くし、ささげ尽くしました。モーセは、彼らが自分を苦しめた民であるのをよく知りながら、主の前でとりなしています。「今、もし、彼らの罪をお赦しくだされるものなら――。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」彼らの罪をお赦しくださいと祈るモーセの心のうちには、民に対する苦々しい思いは一つもありません。パウロもまた、主のみ前にひれ伏し、「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです」と言いました。これこそまことの奉仕の精神ではないでしょうか。

モーセとパウロに見られる精神は、生まれつき二人に与えられたものではありません。二人のうちに宿っているのは主イエス様の霊です。主イエス様は、罪人のために、のろわれた者となってくださいました。これはなんという奉仕でしょうか。私たちの罪のため、私たちのわがままのために、神はひとり子のイエス様をお見捨てになり、み顔をそむけられました。イエス様は、一番つらく、残酷なことにも耐えてくださったのです。イエス様はこの地上での奉仕の間、多くの人々に苦しめられ、責められ、誤解され続けました。その人々の罪のために十字架につけられ、断末魔の苦しみの中で**「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」（マタイ27・46）**と父である神に向かって叫ばれたのです。

そのような目にあってもイエス様は、ご自身を否み、捨て去った人々に対して、「兄弟」と呼びかけておられるのです。これが主イエス様の心のあり方でした。イエス様は愛される価値のない私たちのために、のろわれた者となってくださいました。この主イエス様の霊が、モーセやパウロのうちに生きていたのです。パウロもやはり、民のためなら自分の身がのろわれても構わないと、心から祈ったのです。主イエス様の霊が彼らの心を支配することができたからこそ、彼らはこういう心の態度をとることができたのです。

しかし今の私たちは、この主にある奉仕の「心のあり方の基準」から、なんと遠く離れていることでしょうか。

2. 主の目的を実現するための闘い

ここで、出エジプト記32章とローマ人への手紙9章に至る前に、何があったかを見てみましょう。出エジプト記21章から31章は重要な箇所です。モーセがシナイ山に入り、そこで主との親しい交わりを持ち、主から幕屋のひな型を詳しく示されます。シナイ山は啓示の山です。主はご自身が住もうとされる幕屋の規範をモーセにお示しになりました。主はその幕屋に住み、ご栄光とともにご自身を現わそうと望まれたのです。幕屋の規範が神から示されたのは、モーセにとって素晴らしい体験でした。ところが、示された幕屋の建設に、すぐには着手できなかったのです。32章をみると、民が罪を犯して堕落したことが書かれています。モーセはそのために、深刻な悩み、考えられない苦痛、闘いを経験しました。いつの時代も主のご目的を実現するためには、常に闘いがともないます。

次にローマ人への手紙9章の前の8章ですが、これも素晴らしい箇所です。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

（ローマ 8・1、2）

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦

難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ 8・17、18）

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。（ローマ 8・28、29）

神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。（ローマ 8・30）

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。』と書いてあるとおりです。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ 8・31〜39）

このローマ人への手紙8章を読んでいると、私たちはいつの間にか高い所へ引き上げられていく気がします。この章には、私たちに対する主の永遠の目的が明らかにされています。29節「**神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです**」。これが主の目的です。さらにローマ人への手紙12章4、5節に、この目的が実現されたときにどうなるかが書かれています。「**一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。**」

モーセとパウロは二人とも素晴らしい神の奥義を上から示されました。すなわちモーセは「神の家」である幕屋を教えられ、パウロは「神の宮」である「キリストのからだである教会」を教えられています。しかし、二人とも主の目的を示された後、それを実現するまでに大変な闘いの中に投げ込まれました。それは主の目的が達成されるための非常に激しい闘いでした。

モーセの場合、出エジプト記32章を見ると、悪魔が主の目的をだめにしようと躍起になっていることがよくわかります。主によって救われたイスラエルの民の中に偶像礼拝の霊が入りこんでき、人々は金の子牛を造って礼拝をささげ、まことの神から離れてしまいました。悪魔は今も、私たちの生まれながらの性質を利用して、主の目的が実現されないように働きかけてきます。

もし今、私たちが自分の弱点に気づいているなら、そ

のまま主に、すべてをゆだねましょう。反対に自分自身を尊び、主の前にありのままの姿でいようとしない人々は、主を否定することになります。全能である主のみ前では、私たちは貧しく、惨めで、憐れな、盲目の、裸の者です。そのありのままの自分を告白して、主にすべてをゆだね、私たちのうちに、また私たちを通して主に働いていただく恵みにあずかりたいものです。

さて、「主の宮」は、いつ建てられたのでしょうか。それは、偶像礼拝者を除くというきびしい闘いの後でした。モーセとレビの子たちは、イスラエルの民の中から、偶像を拝んだ人々を除かなければならなかったのです。

モーセは、民が乱れており、アロンが彼らをほうっておいたので、敵の物笑いとなっているのを見た。（出エジプト 32・25）

イスラエルの民は、神である主の証し人になっていませんでした。

そこでモーセは宿営の入口に立って「だれでも、主につく者は、私のところに。」と言った。するとレビ族がみな、彼のところに集まった。そこで、モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう仰せられる。おのおの腰に剣を帯び、宿営の中を入口から入口へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ。」レビ族は、モーセのことばどおりに行なった。その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。そこで、モーセは言った。「あなたがたは、おのおのその子、その兄弟に逆らっても、きょう、主に身をささげよ。主が、きょう、あなたがたに祝福をお与えになるために。」（出エジプト 32・26〜29）

私たちの場合も同じです。心の中から偶像が取り除かれ、自分の利益や自分の考えを主の前に恥じるようになって初めて、「主のみからだ」が建て上げられていくのです。それまでは闘いと悩みがあります。ガラテヤ人への手紙を読むと、パウロがガラテヤ人のためにも激しく闘ったことがわかります。ガラテヤ人たちは「信仰による義」の恵みにあずかっていたのに、誤ったユダヤ教に足を踏み入れてしまい、律法の行ないにしばられて、その霊的状態は荒野をさまよったイスラエルの民のように荒れてしまいました。

主の目的が実現されていくところには、いつも闘いがあります。主の目的は、ご自身がお住みになる、真の「イエス様のみからだである教会」を建て上げることです。エペソ人への手紙にそのことがはっきりと書かれています。

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ 1・23）

この「教会」が実現すれば、あらゆる問題は即座に解決されます。確かにこの「キリストのからだである教会」が建て上げられるためには、多くの悩み、苦しみ、誤解がともなうでしょうが、主は必ず、栄光に満ちた「主の教会」を建て上げられます。また、そのことを御霊は確信させてくださいます。

3. すべてをささげることの必要性

ここまで、「モーセとパウロのうちに宿った主の霊」と「主の目的を実現するための闘い」について見てきました。次に、「すべてをささげることの必要性」について考えてみましょう。

私たちはすでに、「主の目的」を主ご自身から教えられ、それをはっきりと心得ているでしょうか。主がモーセとパウロに示されたように、主は私たちにも「主の目的」を教え、示してくださっているはずです。その主の目的を達成するために、私たちは自分のすべてを主におささげしているでしょうか。自分のすべてを主におささげすることは非常に大切です。自分のすべてを主におささげするとき、自分の利益、立場、名誉などはどうでもよくなります。主の目的が何であるかを心の眼で見て、

すべてを主におささげするとき、「キリストのからだである教会」がその人のいのちとなり、すべてとなるはずです。モーセはイスラエルの民を思い、「主の家」を思うあまり、主のみ前に心を注ぎ出して祈りました。**「もし、彼らの罪をお赦しくださされるものなら――。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください」**。イスラエルの民が立ち直るか、そうでなければ自分がだめになるか、どちらかを主に迫っているモーセの姿が目に浮かびます。すべてを主にささげ「主のみからだである教会」を思うとき、二つの道を選び取ることはできません。私たちを通して「主のみからだ」が真に建て上げられるためには、自分を捨ててかかる態度こそが必要です。主が私たちを御心のままに働かせることができるよう、私たちは自我を明け渡し、自らは何の価値もない者であることを主に告白しましょう。自分が何らかの役割を演じようなどと、決して思わないようにしましょう。

モーセが祈りの中で明らかにしたことは、「主がお選びになったイスラエルの民こそが大切なので、自分は大した者ではない、自分は役に立たない者で、自分の救いやいのちは重要ではない」ということです。またパウロも、もし主のみこころがあらゆる人々のうちになされていかなければ、自分は何のために救われ、何のために生きているのかわからない、と言っています。

主は、そのみこころのすべてを「主イエス様のみからだである教会」に注いでおられます。ですから、キリスト集会のすべての集会が、主のみこころのままに主によって建て上げられることこそが、何にもまして最も重要なことです。

もう一度、ご自分に問いかけてみてください。私たちはどうして救われたのでしょうか。何かを得るためなのでしょうか。天国に入るためなのでしょうか。いろいろな祝福をいただくためでしょうか。残念ながら、多くの人々はそれらを得るために救われたのだと考えがちです。しかし、決してそうではありません。私たちは主

の目的を成し遂げる「主のしもべ」となるために救われたのです。この主の目的を成し遂げるには、いろいろな価（あたい）を払わなければなりません。「主のみからだ」を建て上げるという主の目的を成就するには、いのちさえもささげる必要があります。イエス様は次のように言われました。

「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」（マタイ 16・25）

私たちは「主のみからだ」である兄弟姉妹のためなら死もいとわない、兄弟姉妹は自分のすべてである。と思うまでに主イエス様と一つになっているでしょうか。「主のみからだ」である「教会」、つまり主にある兄弟姉妹が、お互いひとりひとりのすべてとなっており、その霊的な思いが自分自身のいのちとなっているでしょうか。

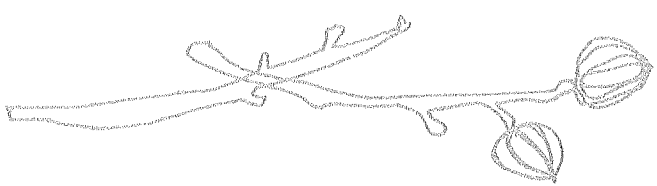
この「主のみからだ」を建て上げたいという願いは、モーセとパウロのすべてでした。二人は自分の名誉を求めず、ひたすら主を思い、エペソ人への手紙にある「栄光の教会」を建て上げるために、いのちを賭けて闘ったのです。

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。（エペソ 5・27）

パウロはそのために祈りの中で闘ったのです。コリント人への第2の手紙にはパウロの気持ち、心があふれています。

私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。（2コリント 11・2）

ここでいう「あなたがた」とは、主の恵みによって救われ



た兄弟姉妹のことです。パウロと同じように、この目的をもって奉仕しないなら、主は私たちのことを見て悲しまれるでしょう。主はモーセやパウロと同じように、私たちを通してご自身の目的を達成されるために、私たちを救われたのです。私たちは、このような態度で主に仕える準備が整っているでしょうか。そして、この「真の奉仕」は、**「死に至るまで忠実に」**(黙示2・10)主に従っていく奉仕です。

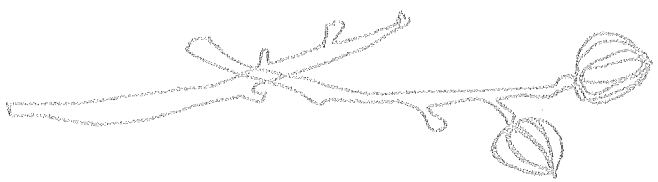
4. まことの奉仕にかならずともなう火のような試み

最後に、もう一つの問題を考えてみたいと思います。「まことの奉仕に必ずともなう火のような試み」についてです。真の主のしもべたちは、特別に激しい試みに遭ったことを告白しています。罪を赦されて救われるためには、私たちは苦しむ必要はありませんでした。救われるために私たちは何の価もはらいませんでした。すべて一方的な恵みでした。しかし、救われて神の子として歩み始めたそのときから、いろいろな悩みや苦しみが襲ってきます。これは一体どういうわけでしょうか。それは私たちが、ただ救われるために救われたのではなく、奉仕するために救われたからです。私たちは主に用いられる真のしもべとなるべきです。しかし、自分を無にしないかぎり、主のしもべとなることはできません。自分を無にするには、激しい試みを通らなければなりません。私たちの内側には、自分を喜ばせたいという思い、つまり自分を愛する心がなんと強く残っていることでしょう。ですから主は、奉仕をさまたげる私たちのわがまま、自我を取り除こうとされ、そのためにいろいろな悩みや苦しみの中を通されるのです。

ですから私たちは、いつも神の偉大な仕え人であるイエス様を見上げていましょう。上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれ、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗われたイエス様(ヨハネ13・4～15)から目を離さないでいましょう。このようなことは、当時は奴隷のすべきことでした。イエス様はそのようなことを自分から進んで行なうことにより、奉仕の真実、そして愛を、態度で示されたのです。イエス様は、ご自分を虚しくされ、自らの名誉も名前も利益もお考えになりませんでした。これこそが真の奉仕の精神です。イエス様は言われました。

「あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。人の子(わたし)が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」 マタイ20・27、28)

これはイエス様の証しであり、告白です。イエス様はまことの父なる神のしもべでした。私たちもまことの主のしもべになるためには、すべてを主におささげしなければならないはずです。いのちさえもささげなければなりません。つまり、自分の自我、自分の意志、自分の権利などのすべてを主にささげなければならないのです。そのためには、多くの悩みや苦しみ、困難を通されることがどうしても必要です。この試みを通った後で、まことの「主のしもべ」となっていくのです。民数記12章3節に**「さて、モーセという人は、地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。」**と書かれています。また歴代誌第1の6章49節に**「神のしもべモーセ」**とあります。モーセがこう呼ばれるようになるまでには、想像に絶する試みの中を通らされたのです。また御霊によりパウロは**「キリスト・イエスのしもべパウロ」**(ローマ1・1)と、自分を呼んでいます。パウロは地にひれ伏し、心から祈っています。**「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」**(ローマ9・3)と。これこそが、主が私たちにも与えようとしておられる、真の「奉仕の精神」ではないでしょうか。 ■



キリスト者の旅

重田定義



私はあなたとともにいる旅人で、
私のすべての先祖たちのように、
寄留の者なのです。
（詩篇　39・12）

人生は旅にたとえられます。その旅はこの世に生まれたときに始まり、そして死によって終わります。しかし、私たちの人生にはこの旅のほかにもう一つの旅があります。それは天地万物をお造りになり、それらを支配しておられる生けるまことの神様を主と仰ぐ信仰者の旅、神の御子イエス様を救い主と信じ、従うキリスト者の旅です。

冒頭の詩篇は、まことの神を主と仰ぎ、主とともに旅をした信仰者ダビデの詩ですが、同時にこの詩はイエス様を主として従う信仰者の思いでもあると言えましょう。そこでこれから私たち信仰者の旅について、ごいっしょに考えてみたいと思います。

イエス様を主と仰ぐ信仰者の旅はどこから始まるのでしょうか。イエス様を信じる者も、信じる前は他の人々と同じように、生まれたときから始まるこの世の人生を旅していました。しかし、イエス様を信じてからは、その者の旅はキリスト者として生まれ変わったときから新たに始まります。ではキリスト者の旅はどこで終わるのでしょうか。それはこの世の人生の旅が死という暗い闇で終わるのと違い、神様のまばゆい光に包まれた天の御国という目的地に入るところで終わるのです。

ヘブル人への手紙には、主なる神様の仰せに従って信仰の旅に出た多くの人々についての記事がありますが、そのうちアブラハムについては次のように記されています。

信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。
（ヘブル　11・8～10）

このとき、彼はすでに七十五歳でした。けれども神様の仰せに素直に従って、住み慣れた故郷を出て、示された土地カナンに旅立ちました。そして約束の地カナンに着いてからも、その地で他国人、旅人として家族たちとともに天幕生活を続けたのです。それはカナンの地も彼にとっては最終の目的地ではなかったからです。アブラハムたちは地上には本当の故郷はなく、この世にある間はどこにいても旅人であることを自覚していました。そして目には見えない天の都を

まことの故郷として、目で見ているように確信し、日々主なる神様に信頼しながらこの世の旅路を歩んでいたのです。ヘブル人への手紙は続けて次のように記しています。

これらの人々はみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会はあったでしょう。しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。

（ヘブル　11・13〜16）

このように、主なる神様に信頼して、主の仰せに従って信仰の旅をした先輩たちは、地上における旅路の終わりに、主が用意されたまことの故郷である天の都に入ることができたのです。

しかし、天の御国への旅を妨げるものはたくさんあります。なかでもサタンは、いろいろな手段を使って信仰者の旅を妨害してきます。かつては自分の支配下にあった者がイエス様を信じて神様に属する者に生まれ変わったことを憎むからです。信仰者の旅人がこの世の人からあざけられ、うとまれ、場合によっては迫害されるのもサタンのしわざです。

また、この世の人々も信仰者の旅人を迫害します。それはイエス様を信じている旅人がこの世の人々と違うからです。どこが違うかといえば、まず身に着けている衣服が違います。この衣服は目に見える衣服ではなく、霊が着る、霊的な礼服です。これについてゼカリヤ書は次のように記しています。

ヨシュアは、（罪に）よごれた服を着て、御使いの前に立っていた。御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言った。「彼のよごれた服を脱がせよ。」そして彼はヨシュアに言った。「見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。」

（ゼカリヤ　3・3、4）

イエス様を主と信じた信者も、イエス様によって罪に汚れた不義という服を脱がせていただき、礼服を着せていただいた者です。この礼服はイエス様を救い主と信じる信仰によって与えられた義の礼服です。イエス様を信じた者はみな、この礼服を着て

天の御国に向かって旅立つのであり、天の御国に着くまではずっと義の礼服を着て旅を続けるのです。

また、イエス様を信じる旅人がこの世から迫害される二つめの理由は、語ることばが違うからです。パウロはコリント人への手紙第一の中で次のように言っています。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（1コリント　1・18）

「十字架のことば」とは、イエス・キリストの十字架上の贖いのみわざによって、人間が神様に犯した背きの罪の刑罰から救われるという、良き知らせ、福音のことです。イエス様を信じた者は恵みによって信者に与えられた主の御霊によって、この十字架のことばを味わうたびに喜びと慰めと希望と元気が与えられます。けれども、この世の人は、この世の知恵のことばには聞く耳を持っていますし、この世の賢人とか知恵者といわれる人のいうことには耳を傾けますが、御霊を持っていないために十字架のことばがわからず、愚かに聞こえるのです。

また、イエス様を信じる旅人がこの世の人々から迫害される三つめの理由は、彼らと違う価値観を持っているからです。これについてパウロはピリピ人への手紙の中で次のように言っています。

しかし、私にとって得であったこのようなもの（血統や経歴など）をみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのために（この世の）すべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

（ピリピ　3・7〜9）

イエス様を信じる私たちはパウロのように、この世の一切のものをちりあくたと思うほど、信仰は強くありません。しかし、そのような私たちでも、イエス様を信じる前と後では、この世についての価値観が知らず知らずのうちに変わっており、主イエス様を知ったすばらしさのゆえに、それまで大切に思っていたこの世的に価値あるものを空しいと思うようになった自分に気づいて驚くのではないでしょうか。それと同時に、この価値観の変化が自分の意思の力によって生じたものでなく、私たち信者の中に住んで

くださっている主の御霊の働きによるものであることを知って、あらためて主の恵みに感謝するのです。

このように、イエス様を信じる旅人は、この世の人々と衣服も、ことばも価値観も違います。しかし、目的地は違っても、イエス様を信じる旅人のたどる道もこの世を通っていますから、旅の途中で人生の旅をしているこの世の旅人との出会いは常にあります。そこで、衣服や、ことばや、価値観が違うがゆえのさまざまな迫害が起こるのです。そのときサタンはイエス様を信じる旅人にささやきます。「あなたはどうして世の中の人々と違う衣服を着ているのですか。どうして違うことばを語るのですか。どうして違う価値観を持つのですか。世の中の人々があなたを受け入れず、うとんじたり、迫害するのはそのためなのですから、ときにはあなたが今着ているイエス・キリストによる義という礼服を脱いで、彼らと同じ善行や慈善による義という服を着たらどうですか。ときにはあなたが語る十字架の愛ということばの代わりに彼らが使っている人間愛ということばで話したらどうですか。あなたが持っているイエス・キリストの信仰に基づく価値観を捨てて、ときには彼らと同じような学問、道徳、倫理に基づく価値観を持ったらどうですか。そのようにして世の中の人々と調子を合わせれば、彼らはあなたを受け入れ、お互い仲良く、楽しい旅ができますよ」と。しかし、これこそ天の御国への旅を妨げようとするサタンの落し穴なのです。

イエス様を信じる旅人である私たちは、この世の旅人とは衣服も、語ることばも、価値観も違うとはいえ、まだまだ信仰が弱く、ときには旅に疲れて足がふらつき、またサタンのささやきに惑わされてサタンの仕掛けた穴に、泥沼に落ち込むことがあります。しかし、幸いなことに私たちはそのときどうすべきかを知っています。穴や泥沼に落ちたと気づいたら、すぐにイエス様に助けを叫び求めればよいのです。ご自分を求める私たちの叫び声をお聞きになったイエス様はすぐにその穴から、泥沼から引き上げて安全なところに置いてくださり、私たちはまた天の御国への旅を続けることができるのです。この体験を味わったダビデは次のように神様に感謝の祈りをささげました。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巌の上に置き、私の歩みを確かにされた。（詩篇　40・1、2）

私たちもダビデのように主に信頼しつつ旅を続けたいものです。

天の御国への旅には、もう一つの大問題があります。それは死の川を渡らなければならないということです。死の川は天の御国への旅路の中で最大の難所であると言えましょう。けれどもイエス様がともにいてくださるという確信をしっかり持っていれば、私たちはイエス様にすがって死の川も恐れることなく渡ることができます。主が次のように私たちを励ましてくださるからです。

恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。

あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。（イザヤ　43・1、2）

これがイエス様の私たちに対する約束です。このみことばを確信して死の川を渡れば恐れることはないのです。

さて、最後に天の御国を目指して旅する私たちイエス様を信じる者には、神様からたいへん重要な任務、すなわち主イエス・キリストを証しするという任務が与えられていることを忘れてはなりません。天の御国への旅路はこの世を通っています。ですから私たちは旅の途中で多くのこの世の旅人に出会います。いろいろな目に会って悲しみ苦しんでいる旅人、重荷を負って疲れ果てている旅人、人生に絶望した旅人、自分の無力さ愚かさを痛感している旅人などもいます。そしてそれらの旅人の中には、変わった服を着て、変わった言葉を使い、変わった価値観を持つ私たち信者が、苦しい目にあって、よろめきそうになっても、倒れずに希望を持って旅を続けるのを見て不思議に思い、心を開いてくる人がいます。神様がその旅人の心を砕いて導いておられるからです。そのときこそイエス様を証しする機会であります。その旅人にとってイエス様を知る機会はこのときしかないかもしれません。ですからその機会を逃さないようにイエス様を信じる私たち旅人は、いつも目を覚ましていることが大切です。こうして私たちが祈りながら天の御国への旅を歩み続けるときに、御霊の導きによって次々とイエス様を信じた新しいキリスト者が誕生し、ともに手を携えて天の御国目指して旅することができるならば、なんと幸せなことでありましょうか。



重田定義
東海大学医学部名誉教授。慶応義塾大学医学部専門部卒、東京都出身。

でもおことばどおりに

工藤善清



群衆がイエスに押し迫るようにして神のことばを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸べに立っておられたが、岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆に教えられた。話が終わると、シモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい。」と言われた。するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましょう。」そして、そのとおりにすると、たくさんの魚がはいり、網は破れそうになった。

（ルカ　5・1～6）

イエス様がなさった奇蹟の二つです。

シモン・ペテロはプロの漁師です。ゲネサレ湖で何十年も魚をとっていて、湖の隅々までよく知っている漁師のプロフェッショナルです。そのシモンたちは昨夜一晩中働きましたが、何一つ取れませんでした。そのシモンに、イエス様は「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」とおっしゃいました。

シモンはびっくりして、瞬間的に思ったことでしょう。「プロの自分でもダメだったことを、この方の言われるとおりにしてもダメではないか。この方は素晴らしいことをおっしゃりまた、なさっているけれど、ことこのゲネサレ湖での魚とりについては、自分があの方よりはるかによく知っている。その自分が一生懸命やってダメだったんだから、『深みに漕ぎ出して網をおろせ』と言われても・・・」。しかし、次の瞬間に思ったことでしょう。「しかし、ちょっと待て。あの方は我が家でしゅうとめがひどい熱で苦しんでいたのを、おことばだけでたちまち直してくださった。我が家だけでなくて、いろいろな病気を治してたくさんの奇蹟をされている。普通の人間にはそのようなことはとてもできない。あの方はひょっとしたら神の・・・そうだ、この際、自分の常識では納得できないけれども、あの方の言われることを信じて従ってみよう」。

シモンが、自分の専門分野でプロとしてのプライドを脇に置いて、人間的には理解できないことを言われてそれでも従ったときに、素晴らしい奇蹟を体験しました。「でもおことばどおりに」に、恵みにあずかれる秘訣がありました。

そして、聖書には、常識的には理解できないことを言われて、「でもおことばどおりに」と従って、人間のレベルではありえない奇蹟を体験した人々のことがたくさん書いてあります。

今から五千数百年前にノアとい



う人がいました。神様はノアに「今、地は堕落している。間もなく大洪水を起こしてすべてを滅ぼそうとしている。しかし、あなたは正しい人だ。大きな箱舟を作ってその中に入りなさい。」と言われました。言われたとおりに、ノアは家族とともに長さ三二メートルもある大きな箱舟を作りました。バベルの塔ができる前でしたから、これは人類が建造した最大の建造物となりました。完成までに百年もかかりました。その間、洪水が起こるような気配は微塵もありません。当然、人々はノアたちをバカにし気違い扱いにして嘲笑しました。

そのようなときに、ノアは天に顔を向けて言ったことでしょう。「神様、人々はあなた様の警告を無視し私達をアザ笑ってばかりいます。でもおことばどおりに、私達は箱舟を作ってきました。」

箱舟が完成して7日目から大洪水が起こり、地表のものはすべて死に絶え、箱舟に入ったものだけが生き残ったことは歴史的な事実です。

この「ノアの箱舟」は、すでに信仰を持っている私たちに、実に力づけられるメッセージを伝えています。神様の指示によって箱舟の中は三階建ての構造になっていました。明かりとりは最上部にある天窓だけでした。(これは、光であられる主は常に上におられるということを象徴しているのでしょう。)ノアとその家族は、仕事のために三階建てを昇ったり降りたりしたことでしょう。一階は薄暗くて床は湿っていたかもしれません。そこで作業をしているときに、ノアの息子たちも滑ったりしたかもしれません。しかし、滑ってもそこは「箱舟の中」でした。私たちも、信仰をもってこの世を生活している中で、時には気持が暗くなったり滑ったりします。しかし、滑っても"それは主の御手の中である"ということを思わせられるときに、とても力づけられます。

主への感謝を新たにさせられます。

今から三千数百年前にモーセという人がいました。この頃、神が選ばれた民イスラエル人はエジプトで奴隷でした。苦しみのあまり、彼らは神に叫びます。その叫びが神に達し、神はモーセを指導者として立てて、イスラエル人をエジプトから連れ出すことになります。

その間にいろいろなことがありましたが、結局、数百万人のイスラエル人を率いてモーセはエジプトを出て約束の地カナンを目指します。出発して数日後、直線的にカナンの方向にリードしていたモーセに神様から不思議なお言葉があります。「引っ返して、(コレコレの)海辺に行きなさい。」人間的には理解できないことですが、モーセはこれに従い人々を海辺に引返させます。一方、神はエジプトの王パロの心を変えて「奴隷を去らせてしまい(大失敗、取り戻そう。)」と、全戦車で後を追わせて連れ戻そうとします。

イスラエル人がふと見ると、後から砂塵を巻き上げて当時世界最強の戦車群が迫ってきます。前は海です。絶体絶命。彼らは狂乱状態でモーセをつるし上げます。「どうしてこんなことに・・」「私たちをエジプトから連れ出し、ここで死なせるつもりか!」

その時、モーセは顔を天に向けて言ったことでしょう。「神様、彼らが私を突き上げるのは人間としては当然です。私は、でもおことばどうりに、いたしました。」この直後、目の前の紅海の水が左右に分かれる、という人類が経験した最大の奇蹟が起きたことは誰にも知られているとおりです。

モーセの後、ヨシュアが指導者となって、彼らはカナンの地に入ってゆきます。しかし、そこには先住民族がいて、彼らと戦わなければなりません。最初の戦いはエリコの城攻めでした。その時、ヨシュアに神様から次のような不思議なおことばがありました。「あなたがた戦士はすべて、町のまわりを回れ。町の周囲を一度回り、六日そのようにせよ。七日目には、七度町を回り・・大声でときの声をあげよ。城壁が崩れ落ちたなら・・。」

ヨシュアは戦士たちにその旨を告げ、そのとおりにします。しかし、戦士たちは、皆ヨシュアと同じような信仰を持っていたわけではなかったでしょう。特に血気盛んな若い戦士たちには納得できなかったことでしょう。一日にただ町の周りを一度回りテントに帰ってじっとしていることに耐えられなくなった若い戦士たちは、ヨシュアの理解できない弱腰的な攻め方を非難したことでしょう。そのとき、ヨシュアも顔を天に向けて先のモーセと同じように神様に申し上げたことでしょう。「若い信仰の薄い血の気の多い戦士たちは理解してくれません。でもおことばどおりにしています。」七日間そのようにしたときに、「城壁が崩れ落ち、その町を攻め取った。」

以上のような奇蹟は、聖書に他にも実にたくさん出てきます。いずれも、当事者にとって常識では受け入れられないようなことが神から語られ、それに「おことばどうりに」従ったときに素晴らしい大奇蹟を体験した、という点で一致しています。

誌面の制約上、今から千九百数十年前に起こったもう二つの出来事だけを見てみます。

ある村に十人のライ病患者がいました。イエス様が近くに来られたと聞いて、彼らはそろって出てきて、遠くから声を張り上げて「イエス様、どうぞ憐れんでください。」と願いました。イエス様は彼らにこう言われました。「行きなさい。そして自分を祭司にみせなさい。」これを聞いて彼らはどう思ったことでしょうか。実は、彼らは自分を祭司にすでに見



せているのです。身体の皮膚の一部が変色した時に、彼らは祭司に見せ、祭司はその変色の状況に応じて「ライ病」と判定したのです。

今、治していただきたいと思ってイエス様にお願いしたら「行って祭司にみせなさい。」と言われました。常識的にとるならば、それはもうしました、その結果最悪の判定をされました、また同じことをしてもムダです、という反応でしょう。しかし、苦しみの中で彼らは「常識的には理解できませんが、でもおことばどおりに行きます。」と従いました。その結果「彼らは行く途中でいやされた。」

イエス様の周りにはいつもたくさんの人々がいました。ある時、ふと気がつくと夕食の時間でした。このとき男だけで五千人もいました。手元にはたった五つのパンと二匹の魚しかありません。「さあ。どうしよう。」弟子たちは「解散させて、(各自)周りの村で何か食べるように(しましょう)。」と心配しますが、イエス様は「人々を五十人ずつ組にしてすわらせなさい。」とおっしゃいました。弟子たちはそのようにしました。しかし、男だけで五千人の大群衆です。五十人ずつ組にして座らせるのは大作業です。マイクもなしに、百組も作らなければなりません。弟子たちの中には「こんなことをしてどうするんだろう?五つのパンと二匹の魚しかないのに。」と心配した人もいたことでしょう。「でもおことばどおりに」彼らはこの大作業をしました。「するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように・・・人々は食べて満腹した。余ったパン切れを拾うと、十二のかごいっぱいになった。」

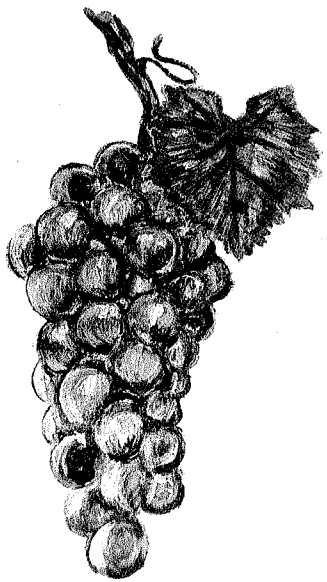
まったく同じことが現在にまで起こっています。ある家庭があります。家の中はメチャクチャです。悲劇そのものです。そして、だれの目にも明らかなことは、原因のほとんどは主人にありました。その苦しみの中で、奥様がイエス様を信じるようになりました。間もなく、奥様が言い始めました。「主人に謝りたい。」周りの人々はビックリしました。「謝るのならそれは主人でしょう。」しかし、奥様は謝りました。こんどは主人がビックリしました。そのとき主人の心にイエス様が働いてくださり、主人も救われました。そして、本当の幸せがこの家庭に初めてきました。もしあのとき、だれかが奥様に「どうしてあなたが謝るのですか?」と聞いたなら答えられたことでしょう。「イエス様に出会って、自分の本当の姿を知らされました。自分の持って生まれた恐ろしい罪とイエス様が十字架の上でそれを清算してくださったことを知りました。それを知らされたとき、嬉しくてたまらなくなってイエス様に心から感謝しました。

そのイエス様から"主人に謝りなさい"と言われました。確かに人間的にいえば謝るべきは主人でしょう。でもおことばどおりに謝りました。そうしたら、今、信じられないような幸せな家庭にしてくださいました。」

イエス様が恵みをお与えになるときに求められるのは、ただ一つ、信仰だけです。その信仰があるかどうかを、いつも常識に反するようなことをおっしゃって試されます。いま、何かの課題を持っておられて、イエス様にお願いされたら常識に反するような答えを受けておられることでしょう。「人間的には理解できません。でもおことばどおりに、」にすべての解決と恵みがかかっていることを教えられております。



江藤善清
経営コンサルタント。東京大学教養学科卒、カリフォルニア大学大学院(フルブライト留学生)。福岡県出身





でもおことばどおりに



主は呼んでおられる

平山義輝

主が三度目にサムエルを呼ばれたとき、サムエルは起きて、エリのところに行き、「はい。ここにおります。私をお呼びになったので。」と言った。そこでエリは、主がこの少年を呼んでおられるということを悟った。それで、エリはサムエルに言った。「行っておやすみ。今度呼ばれたら、『主よ。お話しください。しもべは聞いております。』と申し上げなさい。」サムエルは行って、自分の所で寝た。そのうちに主が来られ、そばに立って、これまでと同じように、「サムエル。サムエル。」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております。」と申し上げた。

（1サムエル　3・8～10）

主イエス様は私たちにいつも呼びかけておられる、ということを真剣に考えてみることは大切です。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

（ヨハネ　11・25）

ヨハネの福音書の冒頭、一章一節には、「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」とあり、この神のことばによってのみ、私たちは喜びや平安を与えられるのであり、生きる力を内なるところなら感じるのではないでしょうか。

そうしてこれらのことばは、救いを受けている者や、また神のご計画の内に入れられている者にいつも語りかけられているだけでなく、神に背を向けている者にも呼びかけておられるのです。なぜなら、聖書は人の救いのために語られたみことばだからです。

さて、旧約聖書の創世記に次のような箇所があります。

ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

（創世記　6・8）

ノアはすべてを主が命じられるとおりに、五百歳の時から百年かけて箱舟を作り上げ、それに乗り込んで四十日四十夜の大洪水と百五十日間を水の上でさまよい、主の祝福の中におかれました。

わずか八人の人々が、この箱舟の中で、水を通って救われたのです。そのことは、今あなたがたを救うバプテスマをあらかじめ示した型なのです。（1ペテロ　3・20、21）

また、出エジプト記二十五章から三十一章にあるとおり、主は四十日四十夜、山にいたモーセに、多くのことを告げられました。モーセは神の仰せられたとおり、奉納物を忠実に納めました。出エジプト記を見ても、旧

約聖書の他の部分を見ても、人々は多くの日数と約束事に従って、神による救いのために備え、整えたのです。主である神を信じる人々は、「神が語られた」ことを素直に聞き、その神のことばそのままに忠実に立っていたのです。

しかし、今こうして現代に生きている私たちは、全能の造り主であり、いのちの与え主である神の前に、そのように素直な態度で近づいていくことができるでしょうか。

人類はこぞってこの世界を自分たちの住むにふさわしい所にしようと知恵を出し、多くの労力を費やしてその目的を果たそうとしています。その結果、人々のしていることは、自分たちのしみと汚れで神の愛を隠そうとしているように見えます。

ノアやモーセは、主である神の御旨にかなうように長い間熱心に祈り、努めたのです。しかし私たちは、半時間も主である神に心を向けることなく、こちらからあちらへと心を移すような者です。私たちのすることは何とはかなく、短く、また心変わりしやすいことでしょうか。

その生涯において、多くの時間と労力を神のみ前に差し出したノアやモーセは、「全き人」であると言われ、神とともに歩むという恵みにあずかっていますが、「全き心」を持たず、聖い心であることに集中することのめったにない私たちは、果して、常に主である神を迎え入れる用意ができているでしょうか。

またダビデは、神の箱（主の臨在を象徴する箱）を前にして、全力で喜び踊ったのです。

ダビデとイスラエルの全家は歌を歌い、立琴、琴、タンバリン、カスタネット、シンバルを鳴らして、主の前で、力の限り喜び踊った。
（2サムエル　6・5）

ダビデは、神が祝福し、恵みを豊かに注いでくださっていることを、全身をもって感謝したのです。その様子は、サウル王の娘であり、ダビデの妻でもあるミカルの高慢な目からは卑しく見えたほどでした。

それでは、モーセやダビデのように全身全霊をあげて神に向きあっていない現代人は、「新しい天と地」を踏むことはできないのでしょうか。決してそうではありません。イエス様は「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。」（ヨハネ　15・4）と言われたように、主のみ声を熱心に受け入れる全ての人々に対して、主はあふれるばかりの豊かな恵みを与えようとし、永遠の救いを約束しておられるのです。主の一方的なあわれみによる「救い」を与えようとしておられるのです。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。
（エペソ　2・8）

この豊かな恵みを私たちがいただけるのは、小さな人間が考え出した哲学や科学、また主が創造された天地万物への好奇心や欲望などによってではなく、ただ主への純一な信仰によってであり、神への誠実のゆえなのです。

主イエス・キリストは言われます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。
（マタイ　11・28〜30）

主イエス・キリストこそ、私たちの求めるべきものの全てです。そこには希望があり、心の平安があります。

「わたしのところに来なさい」と言われるイエス様は、ほんの少しの間も主を見上げることを忘れ、主の前にふさわしくない生き方をする私たちを愛してやまないお方であり、神と私たちの間に立ってとりなしをしてくださるのです。

聖書には、私たちは「地上では旅人であり寄留者である。」（ヘブル11・13）と記されています。その旅には目的があるはずです。ある人は有名になることを考えるかもしれません。お金をたくさん蓄えることを計画するかもしれません。しかし、これらの目的は全て自分を中心としたものであり、人間が生きていく旅の本来の目的はまったく違うところにあるのだということを、知る必要がありま

す。聖書には次のようにあります。

主はすべてのものを、ご自分の目的のために造り、…
（箴言　16・4）

主は私たち人間をご自分の子、つまり神の子とするために造られたのであり、私たちの人生の目的は、「神の子」として、主に従ってこの世を歩みきることなのです。私たちはこの世をさまよい歩くのではなく、この目的に向かって歩むべきです。

キリスト・イエスこそは私たちを罪から贖ってくださったお方であり、私たちの生きる喜びであり、慰めであり、目的です。ですから、人間を救い出してくださる主イエス・キリストを思わずに日々を過ごすことは、人間の悲惨です。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く…（ヘブル　4・12）とあるとおり、イエス様はみこと



ばを聞く者になるようにと導いてくださっています。

「みことばを聞く」とはどうすることなのか、それは、私たちがへりくだり、イエス様のみ前に進み出ることです。私たちがへりくだりの心をもつことにより、イエス様はその者を良しとし、語りかけてくださるのです。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。

（1コリント　1・18）

私たちは、パウロがローマ人への手紙で述べていることに心すべきです。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」むろん、そうではありません。「その声は

なしに義と認められるのです。

（ローマ　3・23、24）

神の子であるイエス様が、私たちと同じ人間の姿となられ、この世に来てくださり、十字架の上にいのちを捨てて私たちの罪を贖い、赦してくださいました。その神の恵み、神の救いにあずかるように、光の中を歩くように、優しく呼びかけてくださっているのです。

人間は罪が深く、神に背を向ける者であるがゆえに、主は愛するひとり子イエス・キリストをこの世に遣わし、とりなしと、なだめの供え物とすることによって、人間を罪から解放してくださったのです。

主は、私たちの全てをご存知のお方です。パウロが「義人はいない。ひとりもいない。」（ローマ　3・10）と言ったように、自己中心的で神不在の行動に走りがちな私たちの性質を見通しておられるのです。ですからイエス様は、私たちの心に働いて、みことばを信じる信仰に立つように、いつも「わたしのもとに来なさい」と呼びかけておられます。そうして、「渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者はそれをただで受けなさい。」（黙示　22・17）と言われます。

この恵みに満ちた主イエス・キリストの慈しみの招きは、どういう意味なのでしょうか。どうして罪に汚れ、何のとりえもない者が神に近づくことができるのでしょうか。私たち人間の内側は陰険で直らないのに、どうして主である神を自分の心に迎えることができるのでしょうか。

イエス様は言われます。「わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ　11・28）と。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価

全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」

（ローマ　10・17、18）

窓を開けたら、新鮮な空気が入ってきます。あなたも「窓を開けてみませんか」。新鮮な空気の中にうれしさを見つけるように、聖書のみことばの中にきっと喜びを見つけることでしょう。

まことに、まことに、あなたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。（ヨハネ　5・24）

自分の無力を認め、自分を主に明け渡し、天地創造の神に従うことです。

人はこの世に生きている限り、さまざまなことを日々体験させられますが、私たちが苦しみに、悲しみに会うとき、主がいつもともにいてくださるという約束をいただいていることは、何という恵みであり、喜びでしょう。

そして、神の御声を聞く者は、しっかりと信仰を保つように互いに励ましあい、祈りあって生きていくのです。私たち一人一人は主の宮です。その主の宮である一人一人がともに集い、励ましあって祈るとき、イエス様は大きな喜びをもって恵みを与えてくださり、私たちはその恵みを分かちあうことができるのです。

人が孤独に生きることは、苦しいことです。イエス様を知っているということは、何という喜びでしょう。そして、ともに励まし祈る友人が周囲にいることは何と幸いなことでしょう。

わたし（イエス様）は、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示　3・20）

イエス様は、今一人一人の名を呼んでおられます。イエス様の御声が聞こえる時を逃すことのないように、お祈りしています。

あなたが、サムエルのように、素直に「はい。しもべは聞いております。」と言うことができれば幸いです。



平山義輝
茨城県出身。茨城大学卒。日野自動車勤務（２００４年まで）



主は呼んでおられる

この方はいったいどういうお方なのだろう

森島左武郎



「この方はいったいどういう方なのだろう。」これは主イエス様の弟子たちが互いに言い合ったことばです。では、主イエス様を信じる私たちはどのように言うのでしょうか。

さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう。」と言われた。そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。ところがイエスだけは、ともものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか。」イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。」彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

（マルコ　4・35〜41）

イエス様は夕方になって弟子たちに「さあ、向こう岸へ渡ろう。」とガリラヤ湖に舟を漕ぎ出させられます。また別の箇所では、弟子たちを強いて舟に乗り込ませなさいました。

それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ・・・

（マルコ　6・45）

このようにイエス様は、ご自分を私たちにはっきりお示しになるために、私たちを困難に導かれます。人の力が及ばない時、いわば窮地でこそ主の栄光が現される時です。なぜなら私たちはどうにもならなくなるまで何とか自分でやろうとし、イエス様に頼らないし相談もしないからです。主イエス様はいつも変わらないお方です。嵐の中でも、なぎの時も、

病の中でも、健康な時も、困難な最中も、平穏無事な折も、また貧しさの中にいても、豊かさに恵まれている時にも。イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。

（ヘブル　13・8）

あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり。」と同時に「否。」であるような方ではありません。この方には「しかり。」だけがあるのです。神の約束はことごとく、この方において「しかり。」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン。」と言い、神に栄光を帰するのです。

（2コリント　1・19、20）

この真実で変わらないお方こそ、私たちにとってどんな状況にあっても信頼でき、助けがいただける唯一の、変わることのない堅固なお方です。しかし、私たちは不信仰です。失敗の原因はここにあります。主イエス様を当てにすべき時に思案に暮れてしまいます。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

（ヘブル　12・2）

このようにみことばが命じているにもかかわらず、私たちはすぐそばにいるイエス様に相談もしないで、人に頼って主イエス様を悲しませました。

そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。（ルカ　5・7）

創世記の最後の章、ヨセフとその兄弟たちとの和解の場面からこの例を見てみましょう。

ヨセフの兄弟たちが、彼らの父が死んだのを見たとき、彼らは、「ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪の仕返しをするかもしれない。」と言った。そこで彼らはことづけしてヨセフに言った。「あなたの父は死ぬ前に命じて言われました。『ヨセフにこう言いなさい。あなたの兄弟たちは実に、あなたに悪いことをしたが、どうか、あなたの兄弟たちのそむきと彼らの悪を赦してやりなさい、と。』今、どうか、あなたの父の神のしもべたちのそむきを赦してください。」ヨセフは彼らのことばを聞いて泣いた。

（創世記　50・15～17）

これはヨセフがすべての兄弟たちにあらわしていた愛と赦しと思いやりに対する悲しいお返しでした。ヨセフはエジプトの大臣として兄たちをいかようにでもできましたが、最初にその姿を見たときにすでに赦しどこみ上げてくる愛情ゆえに、「ヨセフは彼らから離れて、泣いた。」（創世記　42・24）のであります。

そうであれば、その後も永年にわたって隠れて兄弟たちの命を助け、親切を尽くしてきた後に、復讐するなどどうして考えることができるでしょうか。それはとんでもなく悲しい誤解であります。「ヨセフは彼らのことばを聞いて泣いた」のは当然ではないでしょうか。

ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。私が神の代わりでしょうか。あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたや、あなたがたの子どもたちを養いましょう。」こうして彼は彼らを慰め、優しく語りかけた。

（創世記　50・19～21）

ヨセフのこの態度は言うまでもなく私たちの救い主、イエス様のひな形です。

さて、初めのマルコの4章の記事にかえります。ここに記されている状況は、もうあたりは暗くなりはじめており、湖上は激しい嵐、突風が吹きあれて、舟は大揺れで波をかぶって水浸し、今にも沈みそうなそのような窮状であります。弟子たちは漁師です。いわばプロです。ガリラヤ湖のことなら、舟のことなら、嵐も突風もガリラヤ湖の日常茶飯事のこと、少々のことなら任せてください、と言うはずの彼らも、今回はあわてふためいたのですから、よほどのことだったのでしょう。

私たちならどうでしょうか。この記事は私たちのために記されているのであり、主イエス様を信じている信仰者に必要があって、ここから学ぶために書かれているのです。

不信仰な態度はよくよく考えると愚かで、すじが通っていないのではないでしょうか。この嵐の中でその愚かさが明らかにされています。確かに周りの状況は絶望と見える暴風雨。しかし、目を舟の中に転じると眠っておられるイエス様がおられます。主を信頼しない不信仰な心はいつもこう考えます。状況だけを見て、イエス様を見ません。反対に信仰者は主イエス様だけを見て状況・環境を見ません。信仰者の秘密は悩みの中にあってこそ喜ぶことができることです。なぜなら、その時こそ主イエス様が働かれる時であり、その栄光を見て私たちが喜ぶことができるからです。私たちが病気になったり、取り巻く環境が厳しくなった時、イエス様を信じる人々は「良かったね」と言います。それは主イエス様がこの時こそ、ご自身の栄光を現され、私

たちがそれを体験的に知ることができるからです。

あのイエス様が愛されたラザロのよみがえりのところでこんな記事があります。

イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

（ヨハネ　11・39、40）

人の目には絶望と見られるとき、なすすべをすべて失って、お手上げの状態の時、ご命令に従って、「おことばですから」とその石を勇気をもって取りのければ、主がみ手を動かされた結果を見ることができるのです。ラザロは墓から出てきたと聖書は記しています。

しかし、弟子たちの「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか。」（マルコ　4・38）という叫びは、イエス様を悲しませるものでした。ヨセフの兄たちが弟ヨセフの愛情にゆだねられずに大いに悲しませたのと同じです。主イエス様が弟子たちの困難と危険に無関心であるとどうして考えることができるでしょうか。私たちもしばしば、困難や試練にあうとき、「何とも思われないのですか」「どうしてですか」と思い悩みます。私たちのわがままのために一切を捨ててくださり、永遠の滅びから救うために十字架の上で血を流し、「父よ彼らをお赦しください。彼らは何をしているか自分でわからないのです。」と私たちのためにとりなしてくださった方がどうして何とも思われないはずがありましょうか。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ　8・32）

ところが、信仰が試みられると私たちはすぐに疑ったり、忍耐を失ったりするものです。私たちは皆、悩んでいます。問題を抱えています、病気、経済的不安、夫婦、家族、子どもの心配。また会社や人間関係など悩みのない者はいません。

信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄に至るものであることがわかります。

（1ペテロ　1・7）

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

（ヤコブ　1・12）

試されていない信仰は役にたちません。主イエス様はいのちの冠を私たちに授けようとして、夜の嵐のガリラヤ湖へ導かれます。その時こそ、この聖書の箇所を思い起こしましょう。

イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ。」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。

（マルコ　4・39）

これが、「何ともお思いになられないのですか」との弟子たちの叫びへの答えです。「どうして、そんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。」とイエス様はおっしゃいました。すべてをその手中におさめておられる方が私たちの舟にいっしょにおられます。それでも、私たちは「いったいこの方はどういう方なのだろう」と言うのでしょうか。それともあの疑い深かったトマスのように、よみがえられた主イエス様を拝して「私の主。私の神。」と告白し、イエス様を仰ぎ見るのでしょうか。

森島左武郎
（株）日建スペースデザイン顧問
兵庫県鳴尾高校、
京都市立美術大学デザイン科卒
岐阜県出身





この方はいったいどういうお方なのだろう

岸壁で手を離し抱きとめられました

元永徹司



妻、晶子さん（右）
徹司さん（左）

私は一九六〇年に東京の郊外で生まれました。父は物理学者で、私は教育熱心な家庭で育ちました。

音楽に例えるならば、私の人生の指導動機（ライトモティーフ）は、努力と自己実現であったと思います。中学、高校、大学と、トップクラスと言われる学校を卒業し、社会に出た後もアメリカに留学して大学院で経営学を学びました。三六歳のときにヘッドハンティングされて、世界でトップのコンサルティング会社に入りました。私は常に、「一番であること」を追い求め、ひたすら努力していました。

朝は四時半に起き、六時前にオフィスに到着して仕事を始め、帰宅は十一時過ぎ。週末も早朝から仕事をしていました。一生懸命に働いて高い収入を得るようになりましたが、その一方で常に将来への漠然とした不安があることに悩まされていました。その不安を解消するため、さらに仕事に没頭しましたが、不安はむしろ高まるばかりでした。哲学書を読み、禅の考えを取り入れてみましたが、何の役にも立ちませんでした。いつまで走り続ければよいのかという焦りの気持が強まりましたが、走るのをやめることは怖かったので、さらにスピードを上げて走っていました。

この頃、家内が吉祥寺キリスト集会に導かれ、イエス様を受け入れました。一九九九年の十二月に初めて家庭集会に参加し、二〇〇〇年の元旦には御代田の国際福音センターに行くことができました。私はヨーロッパの美術や音楽を理解するために、学生の頃から聖書のことを学問として勉強していました。しかし、吉祥寺集会で私が見たものは、自分が知識として理解していたキリスト教とはまったく異なるものでした。けれども、「本当の心の平安は、人間の努力によってではなく、神によってのみ得られる」ということは、理屈ではなく、直感的に理解できました。私は、求めていたものに出会ったと思いました。

わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネ 14・27）

しかし、私には困難がありました。それは、「自己実現は罪である」ということでした。私にとっては、それまでの自分の人生のライトモティーフを完全に否定することであったからです。

当時の私の当惑を例えて言えば、ロッククライミングで必死に岸壁を登ってきたのに、突然、「両手を離しなさい。そうすればらくになる

よ」と言われたようなものでした。手を離せば、今までの努力が無駄になるばかりでなく、まっさかさまに落ちてしまうのではないか、という恐怖がありました。同時に、自分の弱さを認めることは、耐え難い屈辱であるようにも思いました。それまでの私は、言ってみれば自分を神としてきたので、イエス様にすべてを明け渡すことが難しかったのです。

この頃読んだ聖書の数節が、私の心を打ちました。

夜中の三時ごろ、イエスは湖の上を歩いて、彼らのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、「あれは幽霊だ。」と言って、おびえてしまい、恐ろしさのあまり、叫び声を上げた。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」そして、ふたりが舟に乗り移ると、風がやんだ。（マタイ 14・25〜32）

ここでのペテロは、まさに私だと思いました。そして私は、理屈をつけて理解するよりも、思い切って、イエス様を飲み込むように受け入れ、岸壁から手を離すことにしたのです。

私は岸壁から両手を離したわけですが、落ちませんでした。イエス様が、私を抱きとめてくださったのです。

それからの私の人生は、大きく変わりました。もともとの罪深い肉の性質はそのままであり、ふだんの行動も、イエス様を悲しませることばかりです。しかし、私はイエス様を見上げて歩くことを、喜べるようになりました。

元永 徹司（もとなが・てつじ）
1960年東京生まれ。開成中、開成高、東大法学部卒。
ノースウェスタン大学ケロッグ校経営学修士（ＭＢＡ）。
日本郵船株式会社、ボストン・コンサルティング・グループを経て、
株式会社イクティス代表取締役。
妻、晶子さん。

いま私は、自分で小さなコンサルティング事務所を経営しています。仕事をコントロールして、集会の日程を中心として日々を過ごし、ドイツのバイブルキャンプにも参加できるようになりました。そして、家内と共に集会のオーケストラに加わり、ヘンデル作曲「メサイア」の公演を通してイエス様を賛美・紹介する喜びもいただいています。本当に、主の恵みに感謝しています。

「わたし（イエス様）が道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ 14・6）

ドイツキャンプにて、ベーアさんと



あの方は盛んになり私は衰えなければなりません

藤井奈生子

私がイエス様と出会ったのは、父が「一度日曜学校に行くといいよ」と強く勧めてくれたことがきっかけです。

父は家族の中で最初に近くの教会に行き、救われたのです。それまで暗かった父が百八十度変えられて、よく話す明るい人になっていました。私は幼い頃から集団行動が苦手で、落ちこぼれで、想像癖があり、「どうして自分は生まれてきたのだろう。いつか死ぬなら、なぜわざわざ苦しい人生を送らなければならないのだろう」と考え、その頃からお先真っ暗の人生でした。

夏休みの子どもキャンプで、日曜学校の先生から個人的に、イエス様が十字架にかかられる場面のお話を聞きました。いばらの冠を頭にかぶせられ、手と足を大きな釘で打たれ、血を流された場面は、私の目の前で映像となってはっきり見えました。その悲惨な状況に目を覆わんばかりでした。このイエス様の苦しみは私の罪のためだということ、「ごめんなさい」とお祈りすれば、赦されて救われ、永遠のいのちをいただいて天国に行けるということ、イエス様は三日目によみがえられ、また同じ姿でこの世に来られるということを聞きました。そして先生と一緒にお祈りしました。お祈りした後は、目の前が光であふれていて、うれしくて、「私は救われたの！」と友だちに言いまわっていました。

それから十年間教会に行きましたが、だんだん喜びがなくなっていきました。人の目を気にして、良い子を演じることを強制されているような雰囲気に耐えられなくなっていきました。そんな時に母が乳がんになりました。病床でベックさんのお話の録音テープを聞いた母は、退院してまもなく吉祥寺キリスト集会に通うようになりました。自分も一緒に行ったその日に、「集会では一人一人が主と直接向き合っており、人間同士のつながりは二の次なのだ」と思わされました。良い子を演じなくても、そのままの自分で主のところに来ることが許されている、と知ることができ、ほっとしました。それから春日部でも家庭集会、礼拝が始まりました。



実生活において、人目を気にすることから解放されたのは、大学生になってまもなくでした。大学は高校までと違ってクラスがなく、友人関係も自分で築き上げなければならないことに気づき、友だちに嫌われたくないという思いで必死になっていました。「自分が言った言葉で、友人がどう思い、返答し、それをまた私が次にこう言ったら…」とシミュレーションしてからでないと、友だちに話せなくなってきました。それが面倒になると、ただ自分を押し殺してニコニコしているしかなく、道化のように演じている自分に嫌気がさし、どうしようもなくなりました。しかし、ある時、そのことをイエス様に叫び訴えたら、一瞬にして心の重荷が消え

たのです。人が私をどう思うかはどうでもいいことで、もし私を嫌うことがあってもそれは私自身の問題ではなく、その人の問題なのだと思うことができました。ありのままの自分を友だちにさらけ出すことができるようになり、たとえ意見が違っていても気楽に言えるようになりました。友だちは私の変化に気づいたようですが、友人関係が崩れることはありませんでした。

声楽を専門に音楽大学を卒業した後、オーストリアとドイツに留学しました。留学したての頃、声楽の先生につきながらコンクールをたくさん受けました。しかし良い結果は出ず、やはり現地の音楽大学に入ってきちんと総合的に勉強しようと思い、たまたま受けたドイツ歌曲の先生のレッスンがとても興味深かったので、その先生のクラスに入りました。しかしそこで、私の歌い方をすべて否定されたのです。ドイツ音楽を表現する上で、精神的にも日本的な奥ゆかしさなどをネガティブにとらえられ、人格そのものを変えるよう要求されるという本当に厳しいレッスンでした。それでも、一つ一つ祈り、歌い方をもイエス様にたずね祈って見ると、答えをいただけたこともありました。今思えば、このように厳しく自分を否定されたことは、私にとっては砕かれるための必要な経験でした。

留学中は家族や集会の人たちから離れ、すべてのことを自分でイエス様に祈って決定していくという生活でした。頼れる方はイエス様以外にない状況で、イエス様と一対一で静かに向き合うことができる素晴らしい体験であったと同時に、孤独との戦いでした。そんな時、自分ではイエスさまから離れているつもりがなくても、自分の思いを第一にするか、イエス様の側につくかの選択を迫られる経験をしました。当時の私にとって、それは苦しみでした。なぜなら私にとってとても大切なものを手放さなければならなかったからです。しかし、イエス様は両親を通して、イエス様の道を選び取りなさいと言われました。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。

（エペソ 6・1）

そのとき私はボロボロで、何の判断力もなく、このことばが重くのしかかり、平安もなく、イエス様に対してどうして、なぜ、という気持しかありませんでした。

主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

（ヨブ 1・21）

当時はこのみことばを握りしめているしかありませんでした。自分が大事にしているものをはっきりイエス様から「必要ではない」と宣告され、取られたのです。私の願いとは反対方向にものごとが進んで行ったので、イエス様を信じることによって、損をしていることがたくさんあるのではないか、と思ったこともありました。しかし、それは間違っていました。それから今に至るまで、私は必要なものをすべていただいているのです。

私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。

（ヨハネ 1・16）

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ 8・32）

イエス様を信じていると言いながら、イエス様以外のものをイエス様よりも大切にしてしまう、愚かな自分に気がつきました。相変わらず自分を義とし、高ぶり、自分のことしか考えられないということにも気づかされました。しかし、だからこそいつも、イエス様の流された十字架の血が私には必要で、ありがたいのです。イエス様が私の罪のために代わりに死んでくださったから、私は今、大胆に神様に近づくことができるのです。

藤井奈生子（ふじい・なおこ）
1972年埼玉県生まれ。
立野小、大増中、大宮光陵高、東京音楽大学、同大学院、
モーツァルテウム音楽大学、同大学院、
カールスルーエ音楽大学、同大学院卒。東京音楽大学講師

仕事として声楽のリサイタルをすることが多いのですが、苦手な歌詞を覚えるという暗譜との戦いがあります。また本番に向けて集中するために、緊張が続くことがあります。そういうとき不安から解放されるためにイエス様にすべてをゆだねる必要があります。「平安をください。あなたが一緒に舞台で歌ってください」と祈ると必ず平安が与えられ、隣でイエス様がうたってくださるのです。今まで百パーセント、そうでした。歌い終わった後も達成感はなく、ただイエス様が運んでくださったという、静かな思いが残ります。本番前は追い込まれ、どうにもならない状態、白旗を上げざるを得ない状態に追い込まれますが、それは、私ではなくイエス様が働いてくださるための恵みなのです。

このような日々の営みを通して、イエス様の素晴らしさを常に肌で体験することができる恵みを、本当に感謝しています。

ドイツキャンプで賛美する奈生子さん



あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。（ヨハネ 3・30）



ご家族揃って。後列左から克明さん、妻、純子さん。
前列左から次男、満くん、長男、直くん、長女、のぞみちゃん。

私は真実でなくても、彼は常に真実です

小池克明

「逃げないで元気よく」これは幼稚園の卒園記念に先生からいただいた私への「送ることば」です。また、次の聖書のみことばも、消極的で人付き合いが苦手な私、自己中心的な私を的確に表現しています。

おのれを閉ざす者（直訳：自分を人から分離させる者）**は自分の欲望のままに求め、すべてのすぐれた知性と仲たがいをする。**（箴言 18・1）

私は赤ちゃんの頃から母に連れられてキリスト集会に集っていました。中学二年生の頃、障害を持つ友人の救いを真剣に考えるようになり、母の意思ではなく自分の意思でキリスト

集会に集うようになりました。

高校の部活では非常に悩み、主に真剣に助けを求めて祈りました。結果、主は心に平安を与えてくださいました。精神的に参っていた私にとってこの平安は奇蹟でした。

私は必死に主にすがりました。しかし、この態度をとり続けることはできず、現実逃避して退学しようとしたため、両親や先生にとても迷惑をかけました。また、主に信頼せず身勝手なことをして、心がとても苦しくなりました。最終的に退学せず退部することで落ち着きましたが、自分がどうしようもないわがままな罪深い者であることに気づかされました。そして、主に悔い改めの祈りをして赦しを請いました。

しかし、その後も「自分はだめだ」と責め続け、主イエス様が十字架で私のすべての罪を背負って、赦してくださったことに目を向けませんでした。そんなある日、キリスト集会の福音メッセージで「救いとは罪の咎めからの解放である」という話を聞きました。これがきっかけで、主が私を赦してくださり、もう自分を責めなくてよいことを、主から教えていただきました。

イエス・キリストのからだが、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。（ヘブル 10・10）

御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。（Ⅰヨハネ 1・7）

この経験にもかかわらず、大学時代に大変不信仰な思いを持ちました。「もし聖書に書かれていることが誤りだったらどうしよう、今までの私の人生は何だったのだろう」と。道で、見知らぬ人が心配になって声をかけてくださるほど、私は落ち込みました。そんな私に、叔母は「あなたはもう救われている。そのことを感謝すればよい」と言ってくれました。私は一人で静まって祈りました。「もし聖書が真実ならば、私は救われていますので、感謝します」と。条件付きの何と不信仰な祈りでしょうか。しかし主は憐れんでくださり、その直後、心に安らぎを与えてくださいました。

その後、私は、救いの土台や根拠は思いや感情ではなく、聖書にあることを知りました。私の思いは日々変わり、当てになりません。その日の思いによって、神様が存在したり、しなかったりすることはあり得ません。また、その日の気分によって、救われていたり、いなかったりすることもあり得ません。神様が存在し、私が救われている事実は変わらないのです。

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のみことばは、とこしえに変わることがない。」

（Ⅰペテロ 1・23〜25）

私たちは真実でなくても、彼（イエス様）は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。（Ⅱテモテ 2・13）

妻とは結婚の約十年前に出会い、彼女を尊敬し信頼するようになりました。結婚の約二年前、聖書の「**彼女は力と気品を身につけ、ほほえみながら後の日を待つ（箴言31・25）**」を読んだ時、不思議と純子が思い浮かびました。結婚について真剣に考えた後、「イエス様が迎えに来られるのを早めるために、必要ならば結婚できますように」と、相手を特定せず主に祈ると、翌日、知人から純子との結婚を勧められたのです。

聖書には、将来、主が天から私たちを迎えに来てくださること、また、私たちがその日を早めるべきことが書かれています。この主のご計画を成就するために、私を用いていただきたいと願って、前述の祈りを捧げました。

その後の結婚生活は鏡のようです。愛のない自分の姿が日々映し出されます。最近、主は家族・親族を通して、私が妻を大切にしていないことを教えてくださいました。「自分以上に妻を愛さなければならない」と言われた時、聖書のエペソ5章を思い出しました。

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会の

小池克明（こいけ・かつあき）
1976年生まれ。長作小、幕張中、千葉商業高、千葉商科大卒。住商情報システム(株)勤務。
妻・純子、長男・直（すぐ）、次男・満（みちる）、長女・のぞみ

ためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。…夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。
（エペソ 5・25、28、29）

「主が私たちのために命を捨ててくださったように、私は妻を愛する」と、言うは易く行うは難しです。主に頼るしかありません。私は主と妻に謝りました。しかし、その後も私の本質は変わっていないため、「自分の正しさを求めるばかりで、相手にとって何が良いことかを考えていない」と、妻は率直に言ってくれました。まったくそのとおりなので否定できませんでした。自分のことばかり考えてきたのです。

このため、義父母との関係もよくありませんでした。しかし、妻に対してしてきたことは、同時に、彼女を生み、愛し、大切に育てた義父母に対してしてきたことにもなると、兄を通して気づかされ、義父母にも謝ることができました。義父母は主を信じていませんが、謝罪後、私たち夫婦の信仰に対する思いや、聖書の教えについて、正直に話し合うことができました。心から主に感謝しています。

主は「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」とおっしゃいました。私にとって一番の隣人は妻であり、次は子どもたちです。妻や子どもたちとの家庭生活はとても楽しいですが、同時に、「おのれを閉ざす者」である私が主の愛を学ぶための貴重な訓練の場なのだと思います。■



主の良くしてくださったこと

小池純子

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。
（詩篇 103・1〜5）

主イエス・キリストに初めて個人的に出会ったのは中学二年生の時です。

私は小学六年生から中学校卒業までの四年間を、父の赴任先であるインドネシアの首都ジャカルタで両親、妹と共に生活しました。

友だちに誘われて日本人教会の日曜学校に通うようになりましたが、友だち

に会えるのが嬉しかったからでした。日曜学校に通う同級生の中に棚村秀樹さんがいました。まさかこの人がその十年後には私たち同級生をキリスト集会に誘い、二十年後には私の親戚になろうとは、誰が予想したことでしょう。

日本人教会は、毎年夏休みに子どものためのバイブルキャンプを催していました。中学二年生の時のバイブルキャンプで聖書の話を聞き、自分を含め数人の級友が涙ながらにイエス様を救い主として受け入れました。イエス様が二千年前に十字架にかかって死なれたのは、私のわがまま、罪のためであったことを知ったのです。罪なきお方が永遠の刑罰から私を救い、赦すために身代わりとなってくださったのでした。

高校受験が近づくにつれ、しだいに日曜学校から足が遠のき、帰国後は教会へ行かなくなりました。教会を探したこともありましたが、行きたい教会は見つかりませんでした。クリスチャンの友人に誘われて教会の集まりに集うこともありました。信仰の道を行きつ戻りつしながら結局はイエス様から遠く離れ、大学生になりました。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ 53・6）

その頃から自分の進路について悩むようになり、人生の意味を深く思索するようになりましたが、答えが得られず、もがいていました。

この時に神様は棚村秀樹さんを通して、私や同級生たちを導いてくださいました。一九九二年、家庭集会で棚村さんがどのようにイエス様を信じるようになったかを話す機会があり、誘ってくださいました。現在奥様である朋加さんと大学で知り合った彼が、吉祥寺キリスト集会へと導かれ、信仰の歩みを始めていたのです。この朋加さんは夫、克明さんのいとこであることを後に知りました。

半年後の夏、長野県の国際福音センターでの集いに、日本人教会同級生で、親友の大久保仁

私は祈り始め、はっきりするまでは吉祥寺キリスト集会の礼拝に通ってみることにしました。棚村さんは家庭集会にも積極的に誘ってくださり、私がイエス様に出会えるように助けてくださいました。聖書を読み始めると、悩みの解決がここにあることが分かってきました。それから一ヶ月ほど経ったある日の礼拝で、今まで何度もイエス様が愛を示して呼んでくださったのにもかかわらず、主を裏切ってきた自分を知りました。イエス様と生きることを拒むことこそが罪であるということが分かりました。私がどうであれ、イエス様は私を諦めることなく、忍耐を持って呼び続けてくださったのです。神様のご愛に全面降伏しました。二十二歳の夏の終わりのことでした。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。（イザヤ 43・4）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠

奈さんやその他の同級生も誘いを受け、参加しました。老若男女、大勢の方々が喜びに輝いていました。聖書だけを中心として一つとなれることがとても不思議でした。本当に大切なことは死の三十分前でもなお変わらない価値を持つものである、という言葉には深く考えさせられました。

ある方から聖書の次の言葉が示されました。

わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。（マラキ 3・10）

イエス様が目には見えなくとも生きておられ、私の祈りに答えてくださるかどうかを、祈って確かめてほしい、と勧められたのです。

あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。わたしはあなたがたに見つけられる。（エレミヤ 29・12〜14）

小池純子（こいけ・じゅんこ）
1972年生まれジャカルタ日本人小・中学校卒業
日本女子大学附属高等学校
日本女子大学・東京学芸大学卒業
夫、克明、長男、直（すぐ）、次男、満（みちる）、長女、のぞみ

のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

（ヨハネ　3・16、17）

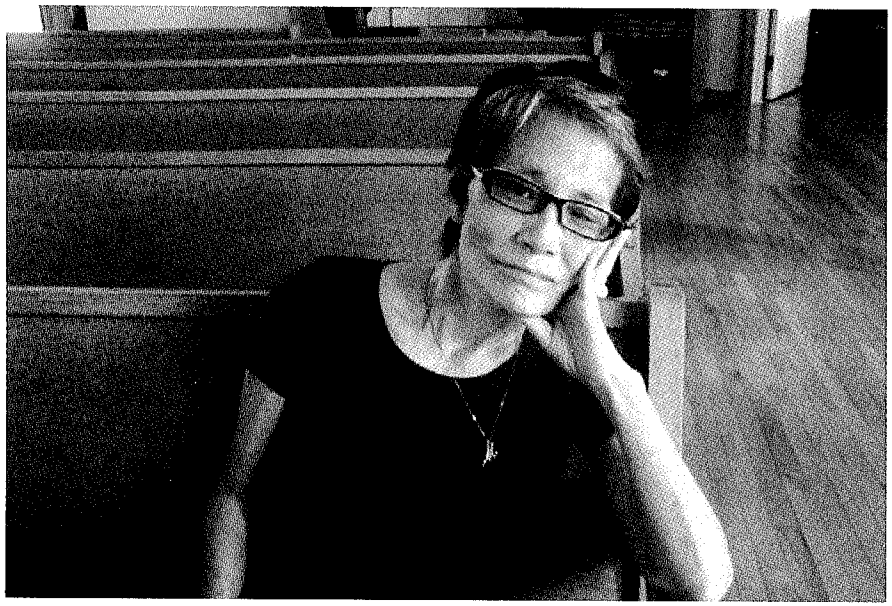
二〇〇三年、十年来の知り合いであった克明さんと結婚し、三人の子どもが生まれました。主にある結婚は三角形に例えられるそうです。一番上の頂点が主イエス様、底辺の両端が夫と妻です。夫婦がそれぞれイエス様に近づけば、おのずと夫婦間の距離も近づけられます。互いにイエス様を愛し、イエス様と私たちがまったく一つの点とされるところを目指して共に歩んでいきたいです。

結婚してからは千葉県の市川キリスト集会に集っています。育児に忙しく、大変な時も多いのですが、主はともにいてくださり、日々の必要は豊かに満たされます。たくさんの方々が、お祈りや助けによって我が家を支えてくださいます。イエス様に愛され、守られ、養われていることを実感する毎日です。限りない主の御愛と皆様に心から感謝します。

今、切に祈っているのは、共に救われた親友、大久保仁奈さんのご一家の信仰が守られることです。仁奈さんはカルロス・ノボアさんと結婚してエクアドルに住み、家族だけで礼拝するという厳しい状況に置かれています。

大久保仁奈さんの洗礼式にて。
左から江藤さん、大久保さん、純子さん、前列、棚村さん





主に生かされて

大澤雅子

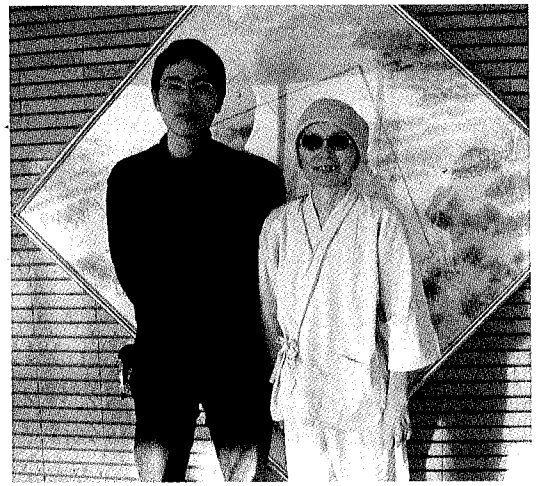
今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（2コリント　4・17、18）

二〇〇八年二月七日、私は人生で四度目の脳腫瘍摘出手術を受けることになりました。

私の頭の中には三五〇ミリリットル缶ほどの大きな腫瘍ができて脳を変形させ、さまざまな神経を圧迫していました。主治医が「手術を希望するなら、もう待っている余裕はない」と子どもたちに説明したほど、ギリギリの状況に置かれていました。

長男、宣明さんと。



腫瘍の圧迫が強まったのは前年の九月頃で、目に異常が出始めました。聖書などの文字が読みづらくなり、次第に理解できなくなっていきました。十二月には、一人で歩くことがままならず、排尿や入浴などに支障をきたすようになりました。その後、子どもたちは私から目を離すことが困難になったため、仕事で家を空けることが困難になったため、仕事で家を空ける間、集会の方々に私の世話をお願いしなければならなくなりました。

一月中旬に入院してからも症状は進み、話しかけても反応しなくなり、食事のときも子どもが私の身体を倒れないように支えて、食べさせてくれていたそうです。排泄や着替えなど、すべてに介護が必要な状態でした。まるで子どものようだったと、退院後に聞かされて唖然としました。

一九九五年に三度目の手術をした時は、次のみことばをいただき、生かされた喜びをかみしめると同時に「次は、主のもとに行けるのではないか」と考えていました。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。（ピリピ 1・21）

しかし、今回私の身に起こされたことは、想像をはるかに超えたものでした。私の身体と思考が壊れて、家族が労苦しなければならない姿を想像できていなかったからです。

私たちは再び、手術をするかどうか、選択を迫られました。「どうするべきか」主に祈りました。

だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。（ルカ 11・10）

イエス様はそんな私たちの祈りに応えるように、ベック夫妻との交わりをご用意してくださいました。ベック夫妻は、「主のみこころとご栄光が現れるように、共に祈りましょう。」と、私に声をかけてくださったそうです。話すことが困難だった私は、「なんとかしてもらわなきゃね。」と、その時初めて手術に対する思いを口にしたそうです。

手術前日の説明で主治医は「最悪の場合、手術中の死もあり得ます。どうなるかは、本当にやってみなければわかりません。」「人間にできることは、すべてやりました。後は神様だけです。」と言ったそうです。息子が「明日は、ゴッズ・ハンド（神の手）になってもらわないと困るね。」と言うと、主治医は、少し笑いながらも堅い表情を崩さなかったそうです。

わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、「わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる。」と言う。（イザヤ 46・10）

私はこの話を聞いて、それほど私の手術は難しく、人間にはどうすることもできない領域だと、信仰者ではない主治医でもそう感じる手術だったのだ、と知りました。

手術時間十一時間三十分。事前に説明された時間よりも早く終わりました。子どもたちは「主が守ってくださった」と驚き喜んだそうです。手術直後、私はすぐに自発的に言葉を発し、足を動かし、家族はもちろん、主治医や看護士さんを喜ばせたそうです。手術後、私はまだ酸素マスクをし、体中を点滴や機械に繋がれた状態で、家族や息子の友人の仕事や体調のことなど、自分のことではなく、他人の心配ばかりをしていたそうです。

娘と息子は大変な労苦を味わいながら、「私たちは、何をしたわけでもない。主がすべてを整えて、導いてくださった。」と言ってくれました。いくら感謝してもし切れない気持です。

後日、主治医がどんな思いで手術に臨んだか、という話を子どもたちから聞き、改めて主に感謝しました。主治医は「手術をする以上、大澤さんには喜んでもらいたい。そうでなければ、手術をやる意味がない。そのためにも『歩くこと・食べること・話すこと』を大澤さんに返してあげたい。」と、自分自身に言い聞かせるように語ってくれたそうです。そのすべて（歩くこと・食べること・話すこと）を、イエス様は私に返してくださったのです。

手術後も、私には鼻の奥に残っている腫瘍を、再度別の病院で摘出する必要が残されていました。そのため、再手術を請け負える耳鼻科医を探す必要に迫らました。不安になった私は、姉に祈ってもらおうとラウンジに電話をかけに行きました。電話の横には、いろいろな雑誌や本が置かれています。電話をかけながら、ふと一冊の本が目に留まりました。「主は生きておられる」13号でした。そこには「主は、私たちが自分をゼロの状態に置いたときに、ご自身を啓示してくださいます。」というベックさんのメッセージが書かれていました。私はとても平安になりました。イエス様が私の思いを一番ご存知で、私のすべてを守ってくださっていることが、良く分かりました。

退院後も、多くの病院で断られ続けましたが、三田にある病院に、主は最善の先生との出会いをご用意してくださいました。「手術はできます。でも、手術後のリスクを考えて、ギリギリまで、今の生活を保つことが、あなたにとって幸せだと考えます。」と、この先生は言ってくださいました。再手術の時は、こうして主によって延ばされました。

目に見えるものに翻弄されるのではなく、主はいつも共にいてくださり、主はどんな時にも最善な道を示してくださることを、改めて知ることができました。

私には腫瘍の圧迫により半年間の記憶が、ほとんどありません。私には、この期間にあった痛みや苦しみの記憶はなく、主に感謝する出来事だけが私の心に残りました。

そして私は、これらすべての出来事を通して、十三年間祈り続けていた「家族が心を一つにして祈る」という願いをも、叶えていただきました。

私にとって、病と共に歩むことは、苦しみではありません。多くの兄弟姉妹の祈りに支えられ、聖書のみことばに心から感謝する日々です。

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。どうか、私たちの父なる神に御栄えがとこしえにありますように。アーメン。（ピリピ　4・19、20）

大澤　雅子（おおさわ・まさこ）
1949年香川県生まれ。
四番町小、城内中、明善高、立正大学文学部卒。
長女、綾子さん。長男、宣明さん。

病室にて。左から、高橋さん、ミンヘンさん、山田さん、長女、綾子さん、雅子さん。



聖書は何と言っていますか

―間違った望み

ゴットホルド・ベック

第3回























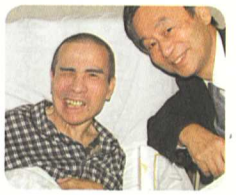



















聖書は主なる神の啓示によるみことばです。天地万物を創られた神は、聖書をとおしてご自身とみこころを明らかにしておられます。ですから、聖書のことばは真理です。イエス様を信じたテサロニケの人々は、真理を知りたいと願い、真理を見いだしました。使徒パウロはこのテサロニケの人々に次のように書き送りました。

私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。（1テサロニケ 2・13）

テサロニケの人々が信頼したように、主なる神のことばである聖書は信頼するに値するものです。信頼すれば、みことばは生きて働きます。イエス様は、聖書のことばは真理であるということを次のように語っておられます。

「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」（マタイ 5・18）

「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」（マタイ 24・35）

イエス様は当時の聖書学者たちに対して、「聖書は廃棄されるものではないから」（ヨハネ10・35）あるいは「神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」（ヨハネ8・47）とお語りになりました。聖書学者たちは聖書を自分の頭で理解し、研究し、議論しようとします。しかし、自分の頭で理解し、研究しようとするものは、主なる神よりも自分を賢いと考えているのです。主なる神はこのような人々に親しくご自身を現わされることはありませんから、このような人々はみことばが生きて働くということを経験できないのです。こうして、彼らは真理から離れてしまいます。聖書は人間の理解を超えたものであり、人はその前にへりくだるか、そこから立ち去るかしかありません。聖書を自分の頭で理解しようとすることは、聖書に近づくのとは反対に聖書から立ち去ることなのです。

イエス様は**「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」**（ヨハネ8・12）と言われました。私たちは、光に向かって歩くか、光を避けて歩くか、のどちらかです。光に向かって歩くなら神の子どもとされ、救われ、祝福されます。しかしそのためには、自分は本当に光に向かっているのか、あるいは間違った方向に歩いているのかを、聖書のことばによって知る必要があります。間違った望みを持ち、間違った方向に歩いていると知ったなら、すぐに方向を正さなければなりません。ですから、間違った望みについて知ることは大切です。以下に例をあげて考えたいと思います。

間違った望み―1
「おきてに従い、よいことをしているから天国へ行ける。」

人々が信じようと信じまいと、聖書が言っていることだけが大切です。それ以外には確かな判断の基準はありません。聖書は、「正しい生活、よい働きをしているから天国へ行ける」と考えている人たちについて、何と言っているのでしょうか。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。（ローマ 3・10〜12）

律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもいないからです。（ガラテヤ 2・16）

主なる神は、「正しい生活やよい働き」といっ







たことよりも前に、まずその「人の心そのものが問題」、と仰せになります。「正しい生活やよい働きをしているから天国へ行ける」と考えている人々にとっての最大の問題は、「よい行ないやよい働き」が単なる自己満足に止まってしまい、しかも「正しい生活やよい働き」がどういう基準でもってそう言えるのか、主でなくて、自分で判断してしまう危険性があることです。分かりにくいことかも知れませんが、「よい行ないやよい働き」で満足している人々は、主なる神から見て、まことに見当外れな人々です。なぜなら人間には、すべての点で「よい行ないやよい働き」をすることは不可能だからです。どれほど立派なプールでも、穴が一つあるだけで、水はもれ出してしまいます。「よい行ないやよい働き」をしていると主張する人々は、このプールのようなものです。人間の目には立派に見えても主なる神の目にはいくつも穴が開いているのです。

律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」（ガラテヤ 3・10）

あるドイツ人の女性は、先天的に重度の障害をもつ子を宿していることがわかりました。当然のように多くの人々から中絶をすすめられました。しかし彼女は「中絶することは殺すことです。私たちはイエス様を信じているから、そのようなことはできません。」と言いました。この世で「当然のように行なわれること」が、主の目にも「当然のこと」だとは言えないのです。それどころか、「当然行われていること」が大変な罪であることが少なくありません。

律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。（ヤコブ 2・10）

では、主なる神のみこころにかなう「よい行ない」とは、何でしょうか。イエス様の次のみことばがそれを示しています。

イエスは彼に言われた。「『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。」（マタイ 22・37〜40）

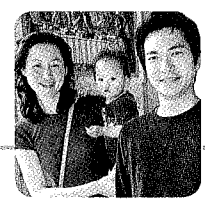
では、「よい行ない」について、イエス様はどのように考えておられるでしょうか。その一つが次のたとえ話にうかがえます。ここに出てくるパリサイ人とは、当時ユダヤ教の一派で、「おきてを厳格に実行すれば神は正しい者と認められる」と主張した人々でした。一方、取税人とは、ローマ帝国から税金の取立てを請負っていた人たちで、ユダヤ人から嫌われ、軽蔑されていました。つまり、パリサイ人は立派な人、取税人は罪人、と見られていたのです。パリサイ人は、外見は高潔で正しく見える人物なのですが、イエス様は、「主は外見でなく、心をご覧になる方であり、そのお考えは常識とはまったく違う」、と語っておられます。

自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くさ







れるからです。」（ルカ 18・9〜14）

ここに、聖書を通して主が言おうとしておられることが明らかにされています。それは、「へりくだれば必ず受け入れられる」ということです。それとは反対に、「私はよい行ないをしているから大丈夫だ」と考える人は、すでにその点で主なる神のみこころに完全に反しています。イエス様は次のように言っておられます。

「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられる者は、神の前で憎まれ、きらわれます。」（ルカ 16・15）

主は、私たちのすべてをご存知です。ですから、うわべで人を判断することはなさいません。次のみことばにあるように心をご覧になります。

主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」（1サムエル 16・7）

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられること、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じなければならないのです。（ヘブル 11・6）

この世には、「私は正しい生活をしているから大丈夫だ」と考える人が多いのです。しかし大切なことは人間がどう考えるかではなく、主なる神はどのように言っておられるか、つまり「聖書は何と言っているか」です。自分の考えを信頼しないで、「聖書は何と言っているか」を、いつも聖書に尋ねることが必要です。






間違った望み－2

「道徳的に正しい道を歩いているから天国へ行ける。」

聖書を見れば、この考えがいかに空しいものであるかは明らかです。人が何と考えようと、正しい人はひとりもいない、と主なる神は仰せになります。生まれたままの、悔い改めを経験していない人間は、初めから罪の中にあります。その人は「死に至る道」を歩いているのであって、どのような服装をしていようと、だれと歩いていようと、そしてもっとも重要なことに、何をしながら歩いていようと、その道は例外なく死に至るのです。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。（箴言 14・12）

私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。

（イザヤ 64・6）

人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。（創世記 8・21）

この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもいないから。（伝道者 7・20）

問題は、あなたがどの道を歩んでいるかです。天国へ行くためには、イエス様によって提供されている救いの道を選ばなければなりません。

くり返しますが、主なる神は人間の心をご覧になります。神の目に隠されているものは一つもありません。そして、悔い改めを経験しない人とは、次のような人です。

彼らは、むなしい大言壮語を吐いており、誤った生き方をしていて、ようやくそれをのがれようとしている人々を肉欲と好色によって誘惑し、その人たちに自由を約束しながら、自分自身が滅びの奴隷なのです。

（2ペテロ 2・18、19）



彼らは、鈍い心を堅く閉ざし、その口をもって高慢に語ります。（詩篇 17・10）

神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。（1ペテロ 5・5）

間違った望み―3

「神は愛だから、人を滅びに至らせることはしない。」

「神は愛だから、あるいは、神は人間を守る方だから、人を滅びに至らせるようなことはしない。」と考える人がいます。このように考える人は、主なる神はどのようなお方か、また主なる神の愛はどのようなものか、知る必要があります。

はじめに知らなければならないことは、主なる神は「人間を心から愛してくださっている」という事実です。その愛は、ご自身のひとり子をこの世に遣わし、私たちの罪の身代わりとして十字架にかける、という愛でした。何よりも貴い方が、その方によって造られた人間の持つ罪のために、死んでくださったのです。

神はそのひとり子（イエス様）を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

（1ヨハネ 4・9、10）

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

（ローマ 5・8）

聖書はいたるところで、人間に対する主なる神の愛を告げ知らせています。以下にあげた聖書のことばをゆっくりと何度も声を出して読んでみるなら、私たちひとりひとりに対する主なる神の愛の大きさが、心に迫ってくるのではないでしょうか。聖書のことばは、読み通すよりも、味わうものであり、目で読むよりも、心に聞くものです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ 3・16）

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ 8・32）

彼（イエス様）は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ 53・5）

主なる神はこのように人間を愛してくださっています。ですから、主は人間が恵みを受けて救われることを望んでおられます。ですから、人のたましいが滅びに向かうのは神のみこころに反することは明らかです。つまりその人が神の愛に逆らって、「自分の意思で滅びの道を死守している」のです。「意識して滅びの道を選びとった」と言うほうが正確かも知れません。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

（1テモテ 2・4）

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

（2ペテロ 3・9）

わたしは誓って言う。―神である主の御告







げ。―わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。（エゼキエル 33・11）

イエス様は、次のように約束しておられます。

「それは、信じる者がみな、人の子（イエス様）にあって永遠のいのちを持つためです。」

（ヨハネ 3・15）

御子（イエス様）を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。

（ヨハネ 3・18、19）

「神は愛だからさばきなどなさるはずがない」と考えている人々は、天地万物の創造主である神のみことばの前に正直になろうとしない人々に下る、正しいさばきを知らなければなりません。

それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。

（ローマ 2・4、5）

ここに語られているように、人は、かたくなさと悔い改めのない心のゆえにさばきを受けるのです。

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

（ヨハネ 3・36）

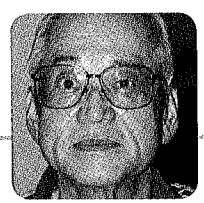
主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょう。（2ペテロ 3・9～11）

悪者どもは、荒れ狂う海のようだ。静まることができず、水が海草と泥を吐き出すからである。「悪者どもには平安がない。」と私の神は仰せられる。（イザヤ 57・20、21）

御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。（ヨハネ 3・18）






間違った望み―4

「最善を尽くしてきたから天国へ行ける。」

不治の病にかかった人が、最善を尽くしたらその病いから解放されるでしょうか。ある人が自分中心の人生観や思いで「最善を尽くしたなら、主は救ってくださる」と考えることは、誤りです。自分の考える「最善を尽くす」ことで主の栄光を受けた者は、一人もありません。イエス様以外の道から入って、救いに至ることは決してありません。人間のものさしで測って、ものごとを判断することは愚かです。主のものさしこそが大切です。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、・・・

（ローマ 3・23）

イエスは彼に言われた。「わたしが道であ



り、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父（主なる神）のみもとに来ることはありません。」

（ヨハネ 14・6）

冷静に考えたら分かることですが、「最善を尽くすことによって救われる」と考えることとは、イエス様からの救いを拒むことを意味しています。

彼ら（救いを拒絶する人々）は神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。（ローマ 10・3）

本当の意味で「よいことをする」とは、イエス様を信じることです。

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。

（ローマ 3・24、25）

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。（ローマ 4・5）

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

（ヨハネ 3・36）

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられること、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じなければならないのです。

（ヘブル 11・6）









間違った望み－5

「何かを信じているから大丈夫。」

このように考える人は、信仰とは何かということがはっきりと分かっておられるでしょうか。また知らず知らずのうちに悪魔を信じているのではないでしょうか。宗教なら何でも人を救うことができると考えることは間違いです。

あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。（ヤコブ 2・19）

あらゆる宗教が救いをもたらすのではなく、天地の創造主である主なる神からの贈り物として受け取る信仰によらなければ、救いはありません。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。（エペソ 2・8、9）

この救いの恵みの贈り物を受け取るための必要条件があります。それが悔い改めです。

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」（マルコ 1・15）

悔い改めと信仰は車の両輪のようなものです。悔い改めのない信仰は、単なる独りよがりに過ぎません。根のない切花のようなもので、人の目には美しく見えても、イエス様と結びついていないため、いのちをうけることはなく、実を結ぶことはありません。逆に、信仰のない悔い改めはまぼろしのようなものです。そこからは喜びも希望もでてきません。そこにあるのは、苦々しい思いと後悔だけです。主なる神に悔い改めるなら、私たちは真に赦されていることを信じることができるのです。

人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言った。そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。」

（使徒 2・37、38）



そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。（使徒 3・19）

「回心」とは、イエス様を信じることを意味します。信じるということは、「罪をきよめる恵みをいただきたいと求めること、その恵みが与えられて喜ぶこと」を意味します。自分の努力や状態に応じて獲得するものではなく、すべて主によって与えられものですから、どのような状況の中でも喜ぶことができるのです。ですから、信じている者はつぎのようにあかしすることができます。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。（ローマ 5・1、2）

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。（ヘブル 11・1）

ある人々は、「教会に属しているから、あるいは何かを信じているから、天国へ行ける」と言います。はなはだしい場合には、「死ねばだれでも天国へ行ける」とさえ思っています。そう思えば心が軽くなることは事実でしょう。しかし、そう思うなら、さらに一歩進めて、まことの神から与えられる「本当の救い」を真剣に求めるべきではないでしょうか。模造品で満足し、落胆し、滅びへと向ってはいけません。後になって気がついてからでは取り返しのつかない、愚かなことなのです。最初から本当の救いを受けることを求めるべきです。そのためには、罪が赦され、聖霊を受けて、新しく生まれることがどうしても必要です。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」（ヨハネ 3・3）






「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」（ヨハネ 3・6）

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。（1ペテロ 1・23）

「間違った望み」はほんとうに恐ろしいものです。永遠の滅びに落ちる、そのときになればだれでもそれが間違っていることに気がつくのですが、その時ではもう遅いのです。だから、「間違った望み」を抱いている人の目は覚まされなければなりません。また「間違った望み」は消え去らなければなりません。私たちはそのための責任を負っています。主なる神にとっては、滅びる人々がひとりもなくなることこそが、真に重要だからです。



聖書は何と言っていますか―間違った望み

















特集記事

家庭集会の恵み

キリスト集会では、全国約九十ヵ所で家庭集会を開いています。個人のお宅に集い、主イエス様を賛美し、聖書のメッセージに耳を傾け、その後にお茶や食事を共にしながら打ち解けた語り合いの時を持つ、というイエス様を中心にした和やかな会合、「主にある家族」の団欒の場でもあります。なんの決まりもない、出入り自由の集いですから、イエス様を信じていない人も気軽に参加できます。午前の集いもあれば午後、夜の集会もありますので、例えば午前には、夫や子どもを職場や学校に送り出した主婦が来やすいですし、夜の集会には勤め帰りのサラリーマンや大学生も立ち寄ります。そして、それぞれに抱えている問題などを正直にさらけ出したり、主からいただいた恵みを語ったりしています。

メッセンジャー（聖書のメッセージを伝える人）が、キリスト集会の責任者、ゴットホルド・ベックさんの場合は、初めて来られた方や、まだイエス様を知らない人のために、個人的な交わりの場が別室に備えられます。そこでは、イエス様や信仰のことが易しく語られますので、イエス様を知るきっかけになります。

実際、家庭集会を通してイエス様のもとに導かれた人は、少なくありません。信仰を持つ人にとっても、貴重な霊的成長の場となっています。そして、これらの恵みの裏には、自宅を提供してくださる人、メッセージを語ってくださる人、会場の設定や茶菓の準備を手伝ってくださる人、信仰を持っていない方を誘い連れてきてくださる人など、多くの方々のご奉仕、特に女性たちの労があります。

キリスト集会が主に祝福された歩みを続けられている理由の一つが、家庭集会の働きにあることは確かです。家庭集会からいただいた恵みの数々や、思い出などを証言していただきました。

学　生時代に救われた私は、当時下宿から電車で二駅だった荻窪の家庭集会に毎月集うようになりました。聖書についてほとんど何も分からない私は、メッセンジャーの重田定義さんの語られるみことばを、乾いたスポンジが水を吸い取るように吸収していきました。

シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。（ルカ 22・31）

このみことばについて語られたとき、私は「自分もふるいにかけられる、しかしそれは、自分の弱さや罪を知るために、主が用いる方法なのだ。」ということを知りました。それから二十年余りの信仰の歩みの中で、このみことばの真実を何度も経験してきました。信仰の戦いを経験する前に心構えができていたことは、とても大きな助けになりました。羽石真二（御代田集会）

＊＊＊＊＊

聖　書のみことばを読み、主を信じ、主にすべてをゆだねているつもりでも、一人で考えていると、確信が揺らいでくることがあります。そんなとき、家庭集会で同じ信仰をもつ方々と親しく交わると、本当に救われた気持ちになります。その喜びに満ちた顔、主を信じきった態度に触れて、安心感を取り戻すのです。

先日も、「主の啓示がなく、主は本当に私と共に居てくださるのか、確信がない」と言ったところ、ある先輩から、「たくさんの信仰の友に囲まれ、こうして握手してくれる多くの笑顔に会えるだけでも、主が働いておられる証拠だよ」と言われ、ホッとした気持ちになり、集会の恵みに感謝しました。秋山達男（近江八幡集会）

＊＊＊＊＊

私　は二〇〇七年二月に相模原キリスト集会に導かれ、集会の方々の自由で力強いお祈りの中に身を置いて、イエス様が生きて働いていることを感じました。そして、ほどなく青葉台の家庭集会（黒田さん宅）に家内と一緒に出るようになり、皆様方の温かさ、優しさ、そしてご奉仕に感謝し感動しました。

当時、信じるということに煩悶していましたが、その痛みをイエス様は癒してくださいました。親密な語り合いを通して多くの方々のしっかりした信仰に触れ、心が軽くなりました。そして、主イエス様と向かい合い賛美している自分に気づいたのです。

御恵みは天にも地にも溢るなり
感謝の手もて
今日もいただく　アーメン

押切久男（相模原集会）

＊＊＊＊＊

騒　がしい喧噪の中から、ひととき静かな森の中へ移されたような安らぎ。十年ほど前、はじめて久我山の家庭集会に集ったときの印象です。膝と膝をつき合わせての集いで話の内容はよくわかりませんでしたが、それまで「会社、会社……」の生活に縛られていた者にとっては、これでいいのかと思うほどの素直な心の交わりを感じました。

一言で言えば、「がんばらなくていい」ということ。これがイエス様だけが与えることのできる平安だとは、しばらくしてから納得できたことでした。妻もまた、このような家庭集会を通じてイエス様に出会うことができ、以後二人でお世話になった家庭集会は数知れず。そして集うたびに「がんばらなくていい」という思いだけでなく、「イエス様は素晴らしい」という新たな発見が与えられることは驚きです。

彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。（詩篇 36・8）

水渡　紀久雄（相模原集会）

＊＊＊＊＊

18　年前ベックさんは毎週のように拙宅の家庭集会に来てくださった。それも朝早くから深夜遅くまで。集会は一日二回行なわれた。今も決して立派とは言えないが、当時はそれこそぼろ家であった。そのような家にお構いなく、人々はただみことばを求めて集まられた。まさしく「いのちの泉」を求めて。座る場所なんて問題でない。階段はおろか、庭にまで椅子を出し、人々は集まられた。イエス様を中心に人々は互いに心を開いて悩み・苦しみを分かち合われた。

ベックさんがすべての奉仕を終え、車で帰ら



特集記事　家庭集会の恵み

れる瞬間も、私たち家族にとってはいつまでも忘れられない光景である。それは疲労こんぱいの極にあるはずのベックさんが車から身を乗り出して、いつまでも手を振られるその仕草である。

新約聖書の時代、イエス様が来られると人々は集まった。拙宅での集いにも、「紹介されるイエス様」を求めて、今も人々は集まってくださる。家庭集会というといつも、聖書の中の次の場面を考える。

数日たって、イエスが…来られると、家におられることが知れ渡った。それで多くの人が集まったため、戸口のところまですきまもないほどになった。（マルコ 2・1、2）

吉田浩（春日部集会）

＊＊＊＊＊

「あなたは、わたしに従いなさい。」（ヨハネ 21・22）

九八六年三月、「光よあれ」の住所録の中にある市川の小川さん宅へ電話を入れました。当時、私は主人と共に船橋市の日本基督教団の教会に所属しておりました。靖国問題など社会的な問題を取り上げた説教を長年聞くうちに、もっとイエス様ご自身に触れたい、と心は飢え渇いていきました。

同じ教会の友人と参加した小川さん宅の二階での集会は、二十人くらいの家庭的な雰囲気でした。池田傳一さんのメッセージの後、今は天国にいらっしゃる奥様の康さんとお話しすることができました。

満たされない思いでいっぱいだったにもかかわらず、役員、教会学校の教師をしているために簡単には出てこられないことを話しますと、康さんは「あなたが喜ばないで誰が喜ぶのですか？」と強い口調でおっしゃいました。電撃を受けたように涙がどっとあふれてきました。私は全然喜んでいなかったからです。長いこと奉仕をして教会活動に一生懸命でしたけど、イエス様からは遠く離れた存在でした。そのことを明らかにしてくださいました。

この日の家庭集会が、生きたイエス様との交わりに導かれる第一歩となったのです。

岩崎直美（吉祥寺集会）

昭和四十年代の家庭集会

松見とみえ（吉祥寺集会）

私たちは長女が生まれた1973年夏、東久留米の社宅に引っ越しました。荷物が片付き、すっかり落ち着いた数ヵ月後のある日、同じ社宅の婦人が「聖書って、いくつあるの？」と訪ねてきました。「大学で学んだカトリックと、その頃誘われていたエホバの証人と、あなたから聞いたキリスト集会とで、言っていることが違う」というのです。

私には答えられないので、ベックさんという方の話を聞いてみませんか、と提案して、ベックさんにお話ししたところ、「一人でも求めている人がいたら、行くよ」とおっしゃってくださいました。こうして家庭集会が始まりました。二回目からは社宅に住んでいる他の方も来るようになりました。

何度目かのとき、家庭集会を持つきっかけとなった婦人が、お産の陣痛が始まっていたのに来てくださいました。その日は、断りの電話が相次いで二人しか集まらず、少しがっかりしていました。でも、その日は、二人の方の救いの日だったのです。

ベックさんはその日、救われるためのお話をしてくださり、その後で「祈りましょう」とおっしゃいました。ベックさんが祈り、私が祈ると、二人も祈られたのです。それぞれ自分の言葉で、悔い改めと感謝の祈りをされました。

喜びでいっぱいになり、皆でケーキを食べていると、婦人の陣痛が強くなり、急いでベックさんが車で病院へ運び、婦人は無事女の子を出産しました。出産後、病院の彼女から電話があり、出産よりも救われた喜びを噛み締めていると、とても嬉しそうでした。1975年7月1日のことです。

ベックさんはその後、何回かメッセージの中で「赤ちゃんとお母さんの誕生日が同じ人がいるよ」と、その日の出来事を話されていました。その時の赤ちゃんも、今は社会人の信者です。

当時のことで、もう一つ思い出すのは、社宅のご主人方のために家庭集会を開いてくださったことです。このときはベックさんと一緒に三人の娘さん（リンデ、ビッキー、スーシー）が来て、集会の間、社宅の子どもたちの面倒を見てくれました。未信者の方々とのお話し合いのためには、吉祥寺から女性たちが、集会のたびに来てくださいました。

本当に主の恵みそのものの家庭集会でした。





家庭集会に集った若いお母さんたち

＊＊＊＊＊

毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。

（使徒　5・42）

私が聖書のみことばに初めて触れたのは、小さな家庭集会でした。それまで聖書やイエス様は自分には関係ない、と背を向けていたのですが、そこには不思議と気楽に集える雰囲気がありました。そして、集う方々の喜びと賛美の中で、私の高慢で堅い心は溶かされ砕かれたようでした。聖書のみことばはよくわかりませんでしたが、この世の考えとは何か違うものがあるように感じました。帰宅してからも自分の罪についてモヤモヤするものが残り、罪を解決する大切なものがあるように思いました。その後は自分から集うようになりました。そこで語られる聖書の福音、「イエス様の十字架の死による罪の赦し」「復活による永遠のいのちの約束と天国の希望」が心にしみこんできました。そうして私はイエス様を信じ救われました。

同じような家庭集会の恵みを、多くの方々が体験され、救いに導かれることを祈っています。

国川憲三（吉祥寺集会）

＊＊＊＊＊

私が初めてイエス様に出会ったのは、渋々集った家庭集会でのことです。語られる聖書のみことばはさっぱりわかりませんでしたが、何度か集ううちに、なぜか心地良く感じて、居眠りをしました。そして、メッセンジャーの方が「国川さんは私の隣に座ってください。」と優しく言ってくださった時から、みことばを真剣に聞くようになりました。その後、日曜学校のキャンプで「ローマ人への手紙10章9、10節」の箇所を目にした時、自然に涙が出て胸が熱くなりました。こうして私は救われたのです。家庭集会に集った時からの主の導きだったと思っています。

それから、十数年後にわが家で家庭集会を開く恵みにあずかり、イエス様を伝える喜びに満たされました。一時、集会疲れで平安を失ったこともありますが、悔い改めて奉仕の喜びが戻りました。その後、私は大きな病気を二つも与えら

今年、与えられた家庭集会

名須川知子（西神集会）

「西神集会で家庭集会をぜひ起こしてください」と、皆で祈り始めたのは三年ぐらい前だったでしょうか。やがて月一回でも土曜日に開けたらと思うようになり、祈りあっている中で、私は茅ヶ崎の家庭集会に出て、家庭集会は独り者でも開けることを知りました。茅ヶ崎では独身女性のマンションが会場に提供されていました。

でも、私自身が家庭集会のためにマンションを購入するなんて考えられませんでした。当時は、千葉に住む両親のことを考え、できれば関東地方に就職したいと勝手に計画していたからです。しかし、主は私の転勤を許されませんでした。その時、「新神戸の近くにマンションがあれば、千葉に帰りやすいのでは」という思いが与えられ、それが集会の方々の「家庭集会を」という祈りと合わさって、事はとんとん拍子に進んでいきました。今、思っても不思議です。何か背中を押されている感じで、西神集会の礼拝場所に徒歩で行ける近くのマンションを購入できたのです。主が働かれたとしか考えられませんでした。きっと家庭集会は主がしてくださる、という確信も与えられました。

こうして2008年3月に開始したばかりの家庭集会ですが、私の家の家庭集会ではなく、西神集会の家庭集会として、毎回、主の御業を見せていただいています。集会の皆さんが一致して、メッセンジャーへの連絡、準備から当日の食事、進行、お掃除まで、多くのご奉仕で支えてくださっています。

八月の御代田の「よろこびへのコンサート」の際、「証し」で家庭集会のことを話しましたが、そのとき読んだ聖書の箇所です。

のんきな女たちよ。立ち上がって、わたしの声を聞け。うぬぼれている娘たちよ。わたしの言うことに耳を傾けよ。うぬぼれている女たちよ。一年と少しの日がたつと、あなたがたはわななく。ぶどうの収穫がなくなり、その取り入れもできなくなるからだ。

（イザヤ　32・9、10）

本当にこの聖句のとおりだと、目を覚まされました。マンション購入で浮かれている場合ではないのです。新しい魂の救いのために今、行動しなければ収穫の時を逃すと、主は警告されています。急いで近隣のかかわりのある方々に主を紹介すること、そのことこそが私に、西神集会の群れに、求められていることなのです。この家庭集会が主の器として用いられますようお祈りください。





れ、苦しみと悩みの日々が続いています。しかし家庭集会でみことばと交わりによって生きる力と希望が与えられ、まだ救われていない方々に主を証しする喜びを得ています。

国川雅子（吉祥寺集会）

＊＊＊＊＊

私は、五年前から坂出集会に集っております。わが家で初めて家庭集会を開いたのは三年前の二月、吉祥寺集会の武井さんをお迎えしてのことです。今は天国にいる妻まち子と一緒に準備をし、共に祈りながら開いた家庭集会の恵みは、すばらしいものでした。

以前、教会に通っていたときは、信者同士が腹を割って、信仰の話をすることはありませんでした。しかし、キリスト集会の家庭集会では本音で語りあう雰囲気があり、どちらかというと自分の本音を隠してしまいがちな私も、正直に心の内をさらけだすことができました。メッセンジャーを送迎する車中でも、世間話で始まった会話が、いつのまにか信仰の話になっています。いい歳こいた男同士が車中で、笑いながら信仰の問題を話し合う、こんな恵みは教会では味わえませんでした。そして、そんなやりとりの中で、信仰や聖書について真剣に考えている自分を発見し、「俺も変わったなぁ」と驚きつつ、感謝しました。

小路伸二（坂出集会）

＊＊＊＊＊

中町家庭集会が開かれてから二十年。この間、集会を守り続けてくださった主にただただ感謝です。主は、毎日の生活に疲れ、抱えきれない重荷を背負い、絶望の縁に追い込まれて、滅びに向かっていた多くの方々をお選びになり、先に救われた人たちを導き手として、多くの悩めるたましいをこの家庭集会に集めてくださいました。

家庭集会でのメッセージや証し、和やかな、時には真剣な語り合いを通して、多くの悩めるたましいがイエス様と出会い、主の御名を呼び求め、目を輝かせてイエスさまを証しする者へと変えられていきました。その姿を見せていただくこと、それこそが先に救われた者にとって、なにものにも替えがたい大きな喜びであり恵みです。

また最近、中町の家庭集会では、天国がとても身近に感じられるようになりました。いずれも晩年に救われて、毎回の家庭集会を楽しみにしておられた石森富太郎兄、田中喜美子姉、大江暢博兄の三人のご兄姉がここ数年の間にたましいの故郷である天国に凱旋されていきました。もうしばらくしたら、私たちも天国に行きます。そのときには天国で中町同窓会を開きたいと思っています。

田中順治、節子（吉祥寺集会）

＊＊＊＊＊

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。

（詩篇　133・1）

一三年前、神戸集会が与えられた時に、西宮家庭集会も備えられました。吉祥寺集会からメッセンジャーが土曜から一泊二日で奥様と一緒に来られた時、またベック夫妻の関西・四国方面の伝道旅行の折に、持たれたものでした。新しい人のためにと、ケーキの会を開いたこともあります。

聖書のお話を聞き、食事をいただきながらの語り合いの後、ミニ・キャンプのように泊まられる方もいました。当時、幼い娘が四人いて、家は狭かったのですが、使徒の時代のように共に主を喜ぶ、楽しい集いでした。いろいろなご夫妻が泊まってくださり、親しい関係になったことは、後の試練や悲しみのための主のご配慮でした。

今は六人家族から二人になり、土曜日にメッセンジャーをお迎えして、4時からのメッセージと証し、夕食の交わり、そしてメッセンジャーのお泊りの恵みをいただいております。新しい方がお見えになることを、いつも祈っています。

森島久仁子（芦屋集会）

＊＊＊＊＊

わが家の家庭集会は一九九二年六月、ちょっと劇的に始まりました。その年の三月、急に眼が見えなくなって入院した私は、難病の多発性硬化症を告げられ、「残された時間は少ない、早く聖書の福音を家族に伝えなければ」

＊＊＊＊＊

九七九年、私たち一家は調布市から八王子市に転居しました。これは主のあわれみのご計画の第一歩でした。この地でイエス様に出会うことになったからです。

近所にキリスト集会の方がおられ、そのお宅の家庭集会に出るようになりました。そして、何度か集っているうちに、「月に一回なら我が家を提供してもいいですよ」と言ったことがきっかけで、家庭集会を始めることになったのです。まだ、救いのこともよく知らない時期でした。

始めてみて「これはたいへんなことだ」と知りましたが、多くの方々が来てくださり、大きな恵みをいただきました。聖書の福音に触れ、集会の方々と交わることを重ねる中で、家族全員が救われました。新しい人が信仰に導かれていく姿を見ることも大きな喜びでした。

七年前、夫の病で調布市に戻り、主の恵みよってこの地で「深大寺家庭集会」を与えられました。我が家を捧げることを通して、主の祝福と恵みと希望をいただいています。

古田康子（吉祥寺集会）

という思いが与えられ、キリスト集会の友人に「私、家庭集会をしたい」と告げました。そして、家庭集会が開ける場所を入院中に探し、祈りの結果、広いスペースの新築マンションが与えられました。そんな折、キリスト集会の「よろこびの集い」が別府で開かれ、ベックさんご夫妻ら多くの方々が帰路、わが家に寄ってくださり、家庭集会が開かれたのです。それからは約二ヶ月に一度、メッセンジャーが東京や神戸から来てくださいました。主がすべてを整えてくださった、としか考えられませんでした。

なによりも嬉しかったのは、それまでイエス様にそっぽを向いていた母と姉が、嫌々ながらも集会の準備の手伝いに来てくれたことです。福音に触れるようになった姉は直ぐに、母は少し時間がかかりましたがイエス様を受け入れ、続いて運搬役を務めた義兄、父、その他の方々が救われていきました。

その後、私は卵巣のう腫、乳がん、骨折、多発性硬化症の再発などで十七回の入退院を繰り返し、家庭集会は九九年に閉ざされましたが、「恵みの七年間」に感謝でいっぱいです。

樋田久美子（福岡集会）

実を結ぶ集いとなるために ― ゴッドホルド・ベック著「神の愛」下巻から

＊家庭集会は温かい、個人的な雰囲気の場であるべきです。

＊まだ信仰を持っていない人のために重荷を負いましょう。

＊主イエス様のために、幾人かでも魂を獲得しようという意欲が大切です。
（家庭集会は個人伝道の最も素晴らしい可能性です）

＊信仰の歩みを始めたばかりの人に霊の糧を与え、真心のこもった温かさを伝えるために奉仕しましょう。

＊一方通行の独演となるような聖書講義は控え、互いに聞き合う態度が大切です。皆で互いに自己紹介し合うような時も、延々と自分を語ってその場を独占することは避けましょう。議論などは慎むべきです。

＊他人の欠点を話したり、うわさ話をする場ではありません

＊初めての方も、お客様ではなく、積極的に交わりの輪に参加してください。

＊集いの中心はイエス様です。人が中心にならないようにしましょう。



from Oita

各地の集会から

こちら大分集会で〜す

何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。そうすれば、これらの物は、それに加えて与えられます。小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。（ルカ　12・31、32）



私たちの大分集会は現在、公共施設「別府市コミュニティー・センター」で日曜礼拝を持っています。十人を少し超えるほどの小さな群れですが、このみことばに励まされ、御国を求めて歩んでいます。このほか隔週土曜日に湯布市庄内町（工藤さん宅）と大分市（拙宅）で家庭集会を開き、火曜日にはインターネット配信を通して「吉祥寺集会の学び会」に参加しています。

発足のきっかけは、「光よあれ」との出会いでした。一九八九年、別府市内の教会に通っていた二人の女性が知人宅でこの本を知り、発行元の吉祥寺キリスト集会に書籍注文のハガキを出したのです。そして、たまたま別府の実家に帰省していた野田暢子さんが連絡を受け、差出人の宮崎瞳さんを訪ねたことから吉祥寺集会とのつながりができました。

翌年には、ベックさんが野田さんのお母さんのお見舞いに来られて家庭集会が開かれ、続いて別府で、また宮崎県の綾でも「よろこびの集い」があり、宮崎さんらも参加しました。特に綾の集いでは４人が救われて、宮崎さんのお宅で家庭礼拝をするようになりました。宮崎さんはその後移転して、今は福岡集会に集っておられます。

正式に「別府集会」の名でスタートしたのは一九九一年春、今は吉祥寺集会に集っている浅野寛治さんのお宅で日曜礼拝を始めたときです。ここでの集いは浅野さんが米国ダラスに転勤した九五年まで続きました。

その後、ある施設を利用することになりましたが、外部からの圧力で一年半で使用を断念しました。

今の礼拝場所は一九九八年に与えられたものです。当初、施設側は私たちがどんな団体なのか警戒していましたが、少しずつ対応が変わってきました。ある日、施設の方から「あんたたちは毎週、本当に関心だわ。日曜なのに、他にやることないんかえ？」と言われました。イエス様が働いてくださったのだ、と感謝しました。

大分集会と名を改めたのは、県内の広い範囲から集っているためです。導かれて来る人あり、離れていく人ありで、人数は発足以来あまり変わっていません。新しい魂を誘う努力が足りないことを反省させられています。この小さな群れは、イエス様ご自身が起こされた集会です。集う一人一人が主だけを恐れて歩んでいけますよう、大分集会のためにお祈りください。

（小山田忠功）

Information Box

この手紙は、ある姉妹が愛する末娘さんのために書かれた手紙の抜粋です。

その当時末娘さんは、未信者のご主人の○○さんが別の女性と親しくなったことで悩んでおられました。それに対して、母親として「赦してあげてください」と説く手紙は、主の優しさと赦しの御心がそのまま文面に滲み出ているようで、同じ問題に悩む方々に大きな慰めと指針を与えるものと思い、ここに収録いたしました。なお文中の実名は、同じ問題を持つ方々に「ご自分の母親が語りかけている手紙」として実感していただきたいために省略いたしました。

ある母親の手紙から

「赦してあげてください。赦すことによって、あなたも楽になるのです」。

主の御名を賛美いたします。いかがでしょうか、案じております。朝夕、祈っています。

上の姉さんは、イエス様のことを少しずつ知りはじめているようです。二番目の姉さんからは、時々電話があります。彼女は信仰によって大きく変えられているのです。今、何を見ても聞いても、楽しくて仕方のないくらい満たされているのです。

でも、末っ子のあなただけが、今、苦しそうで、胸が痛みます。神様は必ず祈りに答えてくださることを信じて、あなたのことを祈り続けています。特に子どもには気を配ってあげてください。心の中に影を落さないように。

○○さんはお元気ですか、赦してあげてください。赦すことによってあなたも楽になるのです。からだには気をつけてくださいね。祈っていたら聖書にこんなところがありました。

あなたがたは、むしろ、その人を赦し、慰めてあげなさい。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。そこで私はその人に対する愛を確認することを、あなたがたに勧めます。もしあなたが人を赦すなら、私もその人を赦します。

（2コリント2・7・8・10）

「赦しなさい。そうすれば自分も赦されます。」

（ルカ6・37）

また、ある本で読んだのですが、苦しい時、救い出してくださる主を待っている時間はほんとに長く感じるものです。

私は衰えております。私のたましいはただ、恐れおののいています。主よ、いつまでですか。あなたは。

（詩篇6・2、3）

試練の中に立たされた時、それが意外に長引くと、「主は私のことをお忘れではないか」と案じて叫びだすことがあります。自分は忘れられ、捨てられてしまったのではないかと焦ってしまうのです。

「わたし（主）は、あなたとともにいよう。わたしはあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」

（ヨシュア1・5）

「わたし（主）は、すぐに来る。」

（黙示録3・11）

主ご自身がこのように言っておられるのに、まだその気配もなく、足音も聞こえないではないかと、震えてしまうのです。

しかし遅れるということは、否んでいる、ということではありません。千年も一日のようだと言われる主の時間に、私たちの思い悩む心の時間を、しっかりと合わせることが大事ではないでしょうか。

私たちの思いでなく、神のみこころによって、すべてをなしてくださいますように。そして与えられた時を心静かに過ごし、与えられた時をあせらずに待ちましょう。

私が弱いときにこそ、私は強いからです。

（2コリント12・10）

このみことばを信じて耐えていきましょう。

○○さんは神様を知らないがゆえに、あなた以上に苦しんでおられると思います。赦してあげてください。

私たちの日々の生活は、すべて主のご計画の中にあって、主の時がすべてを支配しています。悩みの時、苦しみの時、喜びの時、悲しみの時、愛する時、憎む時、時はいつか過ぎ去ります。憎むことはたやすいことです。私たちは人を愛するがゆえにいろいろと悩み苦しむのです。

神様にすべてをゆだねて、心静かに、からだだけには気

を付けて、時の過ぎ去るのを待ちましょう。時がすべてを解決します。誰にも相談できないことだけに苦しいことでしょう。でも私たちには聖書があります。いつでも聖書を用いて平安な日々を送ってください。神様になんでも祈れるということは、本当に大きな幸せです。離れていても、あなたといつもいっしょに祈っています。

「主イエス様、娘が悩むとき、どうか御手をのばしてください。豊かな御恵みと平安と、問題解決の糸口をさずけてください。アーメン。」

この末娘さんはその後ベックさんにも相談され、その指示を守られ、祈りながら忍耐して待っておられました。やがてご主人は悔い改めて娘さんの所に戻り、主を信じて変えられました。そして、その後がんになり、平安のうちに天に召され、今は天に憩っておられます。息子さんも立派な社会人になり、やさしく母親を支えておられます。イエス様は、二十五年という歳月をかけて、限りない憐れみと豊かな恵みの中にこの末娘さんを移され、今も愛の目を注いでおられます。なおこの手紙を書かれたのは、沖縄集会を立ち上げられた大城紀美子さん(現在93歳)です。

「無償の愛」こそ介護の基本

施設職員の心に響いた重田定義さんの話



キリスト集会に長年集っておられる重田定義さんが2008年、介護スタッフを対象に「高齢者の幸せのために」と題するお話をする機会を与えられました。重田さんは八十歳を迎えた昨年、東京・町田市の高齢者マンション「町田サンシティ」に入居しましたが、その折、自分がイエス・キリストへの信仰を持つ医師であることを打ち明け、死に対する恐れなど様々な心の問題を抱えている高齢者の方々に、ご参考になるようなお話ができるかもしれません、と伝えていました。入居者を対象に考えてのことでしたが、施設側からは「それなら介護職員に」と予想外の要請が返ってきて、同年4月、6月、7月の「サンシティ介護研修会」で講演することになったのです。

講演で重田さんは、「長生きは幸せか」、「人間の愛と神の愛」、「ケア(看護)とキュア(治療)」、「生活の質といのちの質」、「死は終わりではない」……などについて、平安に死を迎えた人の例や聖書の言葉を紹介しながら、易しく説明しました。そして、年老いた人々が高い「いのちの質」を保って余生を送り、最後には死を恐れず、希望をもって安らかに死を迎えられるように援助するためには、無償の愛をもってケアに当たることが大切です、と強調しました。

「皆さん、真剣に聞いてくださり、一人のスタッフは『介護の基本は愛。介護の技術よりも愛をもって接することが大切だと分かりました』と言ってくれました。神の愛や信仰の恵みなど、聖書のメッセージを、少しでも伝えることができたのは本当に感謝です。主が背後で働いてくださった、と思わされました」と重田さんは語っておられました。

結婚式と葬儀のご報告







Wedding 結婚式 2008年



3/20
大出 展郎・美和



3/15
原 秀幸・奈々子



3/01那須 悟・暢子



3/23
神山 清雄・悠美



3/23
田嶋 鉄兵・美恵

Funeral 葬儀



5/01 鎌田 傳
5/06 相馬 明子
5/14 久馬 千寿
5/15 古賀 忠博
5/30 小早川 宏
6/23 吉屋 英明
7/06 松井 泰子
7/21 竹澤 規
7/31 関口 達美
8/29 延原 政憲
8/29 田中 栞







生きるにしても、死ぬにしても、
私たちは主のものです。(ローマ 14・8)









2007年
9/06 小林 正子
9/19 外間 敏子

2008年
3/18 江野 成
3/29 水島 彰
4/02 三澤 正雄
4/03 桶田 孟子
4/13 鈴木 秀男

かんたんに作れる ブュッシュ・ド・ノエル

ブュッシュ・ド・ノエルは「クリスマスの薪」という意味です。
ヨーロッパ、とくに北欧では、寒い冬に薪はとても大切なもの。
キリスト降誕のお祝いのお菓子とされてきました。
ご紹介するレシピは、応用のきくシンプルなロールケーキで作ります。
バターを使わず、短い時間で焼き上がる生地は
ふんわりと軽いので、生クリームとの相性はぴったり。
薪のようなデコレーションをすれば、
素敵なクリスマスケーキのできあがりです。





材料

《すべて常温にしておく》

＜スポンジ＞
卵　3個
砂糖　60ｇ
小麦粉　60g
ベーキングパウダー 小さじ1/2

＜デコレーション用＞
生クリーム　300cc
砂糖　大さじ4
ココア（無糖）約小さじ4

道具

型：ロールケーキ型または角皿天板
（約 28cm×28cm）
その他：泡立て器　ボール2つ　へら
パレットナイフ　茶こし

作り方

《下準備》

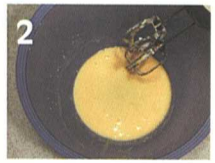
a. 小麦粉とベーキングパウダーをあわせて
ふるっておく
b. 卵は卵黄と卵白に分けておく
d. 型にクッキングシートを敷いておく
e. オーブンを180度にあたためる



《メレンゲを作る》

1. 卵白を泡立て器で泡立てる
角が立ち始めたら
砂糖の半量を
少しずつ加えながら泡立てる

ポイント
角がしっかり立ち
ボールを逆さにして
落ちてこなければOK



《生地を作る》

2. 卵黄を砂糖の残り半量を
入れ泡立て器で白っぽく
なめらかになるまで
泡立てる



3. メレンゲの中に
2で泡立てた卵黄を入れ、
粉とベーキングパウダーを
振るい入れ
メレンゲをつぶさないように
へらでさっくり混ぜる



4. 型に生地を流し入れて
カードで平らにならす



5. 180℃のオーブンで約10分焼く
きれいに焼き色がついてきたら
竹串をさして確認、生地が
ついてこなければ焼き上がり

6. 焼き上がったらあら熱をとる

ポイント
生地が薄く時間が短い
のでオーブンから離れず
様子を見ると良い
焼きすぎると生地を
巻きにくくなる



《ホイップクリームを作る》

7. 生クリームに砂糖を入れ
泡立て器で泡立てる
途中でココアを茶こしで
ふるい入れしっかり
角が立つまで泡立てる



8. クッキングシートから
いったんスポンジを
丁寧にはがす



9. スポンジに巻きおわる
部分だけを残して
クリームをぬる



10. クッキングシートを
引きながらスポンジを
巻いていく







《デコレーションをする》

11. 巻きおわり部分を下にして
パレットナイフ等で
クリームをぬる

焼き上がりの生地が固くなってしまっても大丈夫。縦に3〜4等分に切ってクリームをはさみ重ねれば、こんな形のケーキになります。
生地にココアと砂糖（各約大さじ1）を、クリームにラズベリージャムを加えるだけで、味の違いも楽しめます。





Backen mit Bicky!
ビッキーのケーキづくり